

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

# 二川南

豊橋校区史

23

*Futagawa Minami*









校区のあゆみ

# 二川南



# 翔ける!!



いちにっ! 偉業11連覇 弥栄チーム



遠く富士を望む

## 二川南

山の連なりを望み  
梅田川の流るる音をきく



豊川用水の恵みと先人の汗が  
豊かな大地を育み  
鉄道と道路が産業を育てた



子どもの笑顔と  
お年よりの優しさに  
溢れるまちかど



沢渡の夕暮れに鳥が佇み  
反茂の水辺に憩う  
水と緑のまち



そして今、新しいまちへと踏み出す  
世代交流の掛け橋、  
のんほいパーク歩道橋



そこは、未来へと誘う  
プロムナード

# 発刊によせて



平成18年度  
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものにと終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度  
二川南校区総代会長

半 田 恭太郎

二川南校区が昭和63年4月に誕生して、20周年を迎えます。

昔は宿場町として栄え、歴史のあるまちでもあります。一里山や源吾坂のある東海道を往来する旅人の姿が目には浮かびます。

先人の切り開いた「開拓のまち」でもあります。いまは野菜畑や温室が広がる豊かな農地になっていますが、昔は背の低い松や笹しか生えない原野でした。人々はこの土地を開墾して豊かな土地にしてきました。やがて国道1号線に沿って、いろいろな業種の工場が次々とでき、産業も盛んになり、活気に満ちたまちに発展してきています。

私たちのまちには、先人の残した貴重な財産があります。その一つひとつに私たちと同じ血の通う先人の汗と涙がしみ込んでいます。このかけがえのない共有財産を後世に伝え、大切に守り育てていかなければなりません。

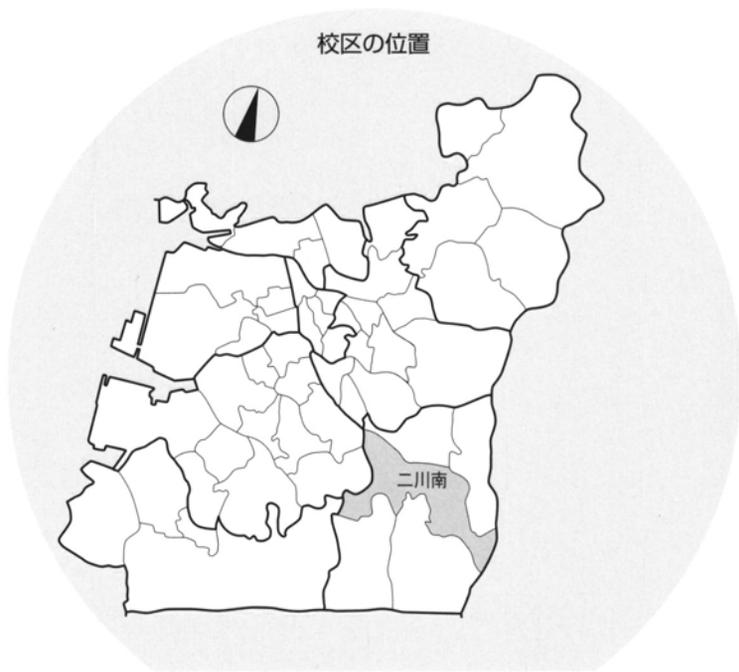
市制施行100周年記念事業の一環として校区史「二川南」を刊行できました。2年間という長きにわたる編集でご苦労をかけた編集委員の皆様、資料提供等でご協力いただいたすべての方に心から感謝を申し上げます。

今後より豊かで活気に満ちたまちづくりに向けて、校区民が知恵と力を合わせて前進できることを願っています。

# 目次

# CONTENTS

第1章 自然と環境		2 社会教育委員会	39
1 二川南校区の位置	7	3 社会体育委員会	41
(1) 位置	7	4 社寺と史跡	43
(2) 土地のようす	7	(1) 大岩神明宮(大岩町字東郷内)	43
(3) 自然環境	8	(2) 二川八幡社(二川町字東町)	43
2 気候の様子	9	(3) 三弥八幡社(三弥町字三ツ家)	43
3 二川南校区の移り変わり	10	(4) 弥栄神社(豊清町字茶屋ノ下)	43
(1) 二川の歴史	10	(5) 葦ヶ原神明宮(豊栄町字東)	44
(2) 人口・戸数の推移	10	(6) 豊清神社(豊清町字茶屋ノ下)	44
(3) 校区の変遷	11	(7) 源吾稲荷神社(三弥町字元屋敷)	44
第2章 歴史と生活		(8) 消えた村、本郷遺跡	44
1 二川南校区のあゆみ	13	5 二川南の昔話	45
(1) 古代より近世	13	資料 総代会・社教・社体委員長名簿	48
(2) 近代～明治から昭和	14	おわりに	50
(3) 戦後そして平成へ	14	参考文献	50
(4) 今後の校区	16		
2 二川南校区の産業	17		
(1) 農業	17		
(2) 商工業	18		
(3) 交通網	19		
3 校区の活動	21		
(1) 校区総代会	21		
(2) 青少年健全育成会	27		
(3) 更生保護女性会	27		
(4) 民生委員児童委員協議会	28		
(5) 二川南分団(消防団)	28		
(6) 老人クラブ	29		
(7) 文化協会	30		
(8) 子ども会	30		
第3章 教育と文化			
1 学校教育・幼稚園	31		
(1) 二川南小学校	31		
(2) 二川中学校	35		
(3) 時習館高等学校・二川分校	37		
(4) 希望が丘幼稚園	37		



# 第1章 自然と環境

## 1 二川南校区の位置

### (1) 位置

**豊橋の南東部** 豊橋市の南東部に位置する二川南校区は静岡県と接しており、東西約6km、南北約4kmにわたって広がっている。

北部は二川中学校区の谷川、二川校区と接し、南部は五並中学校区の細谷、小沢校区と接している。

町別では、大岩町、二川町、東細谷町、細谷町、小島町の各一部と豊栄町、豊清町、三弥町の大部分が校区の範囲となっている。

### (2) 土地のようす

**住宅と工場** 校区の北部は、梅田川沿いにJR東海道本線や東海道新幹線、国道1号線が通っており、西部に住宅が多い。近年では二川駅南口や梅田川沿いの住宅地などの開発も進んでいる。東部は神鋼電機やアーレスティ(旧京都ダイカスト)をはじめとする大きな工場が集まっており、谷川校区や湖西市西部とあわせ、豊橋市東部の工業地域となっている。

**農地** 梅田川の上流部や、その支流である落合川や精進川、沢渡川などの周りには水田が広がり、豊栄や三弥、弥栄などの台地には畑が多く、農業が盛んな地域である。そのため、反茂池や沢渡池、三弥池、弥栄池などため池が多く存在する。標高は、一里山付近で海拔60mを上回り、北、西に向かって低くなり、久保田あたりでは海拔15mほどである。



豊清のキャベツ畑

**公共施設** 二川南校区には豊橋総合動植物公園や資源化センター、二川地区体育館、南消防署二川出張所、二川中学校などの公共施設がある。また、スポーツ広場も整備されつつある。

隣接する二川校区には、窓口センター、大岩老人福祉センター、地区市民館があるほか、視聴覚教育センターや地下資源館、二川宿本陣資料館などがあり、生活、文化の面からも本校区と一体的な地域を形成している。



豊橋総合動植物公園

### (3) 自然環境

**梅田川** 校区の東西を約3kmにわたって流れている梅田川は、春には桜並木がとても美しく、人々の生活に潤いを与えている。国土交通省の調査によると、この梅田川にすむ生物は、コイやギンブナ、ナマズをはじめとして41種類が確認されている。

また、校区にかかる橋としては、東から<sup>すじ</sup>違橋、<sup>かい</sup>道賢田橋、<sup>どうけん</sup>道賢田橋、<sup>たかばし</sup>高橋、<sup>じゅうしちひき</sup>十七疋橋、大岩橋、<sup>さわたり</sup>沢渡橋、西の川橋、桜橋、梅田橋がある。過去には集中豪雨のために橋が流されてしまったこともあった。



高橋被災（平成3年9月19日）

**水環境** 校区にとっては、なじみの深い梅田川であるが、日本有数の清流である豊川とは比較にならないほど水質は悪い。

豊川の吉田大橋と梅田川の沢渡橋地点の水質を75%BOD値で比較すると、吉田大橋では $0.8\text{mg}/\text{リットル}$ に対して沢渡橋では、 $5.9\text{mg}/\text{リットル}$ となっている（平成16年度データ）。沢渡橋では環境基準値 $5\text{mg}/\text{リットル}$ を満たしていない（BOD：河川水質の基本的な指標で数値が小さいほど水がきれいであることを示す）。

平成15年に豊橋市は、小柴昌俊東大名教授のノーベル賞受賞を記念して、小中学生の優れた理科研究を表彰する、「小柴記念賞」を創設した。校区在住の中川<sup>ひさし</sup>永さん（当時二川中3年）の「河川の水質汚染についての研究」が、中学校の部で最優秀賞に選ばれた。朝倉

川と梅田川の水質を5年間調査してまとめたことが評価されたもので、「水質汚染を防ぐため、下水道や浄化槽を整備することが必要」とし、また、「いつか、梅田川が綺麗な川に戻り、昔遊んだ朝倉川のように綺麗な川になってほしいと思う」としている。

二川中学校区から湖西市までの学校、地域、企業などで梅田川クリーン作戦に取り組んでいるが、子どもたちが安心して水遊びのできるような親しみの持てる河川となってほしいものである。

**動物** 校区内にはいろいろな動物たちが生息している。以前よりは数が減少してしまったが、畑地の多い地区では、タヌキやイタチ、野ウサギなどを見かけることがある。鳥類では、キジやヒバリを畑地で見ることができる。そのほかにも、反茂池や沢渡池、梅田川などの水辺では、アオサギ、コサギ、コガモ等をよく見かける。また、冬場になると、あたたかい地方としては珍しくミコアイサが飛来することもある。そのほかにも、鮮やかな青色をしたカワセミやのどかな鳴き声のトビなども生息している。住宅地の近くでもウグイスの鳴き声を耳にするなど、二川南校区は、動物たちにとって住みやすい環境なのかもしれない。



沢渡池のコガモ

## 2 気候の様子

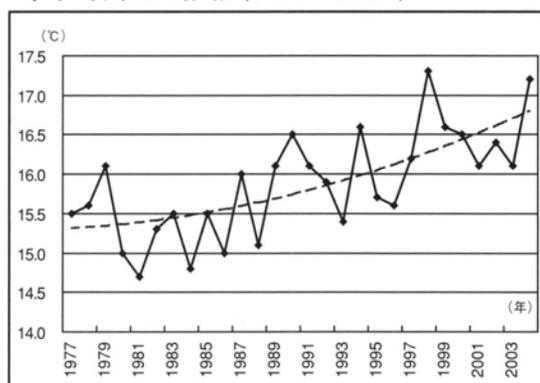
**アメダス** あまり知られてはいないが、気象庁の地域気象観測所（アメダス）が、二川町道賢田の南消防署二川出張所に設置されていた。平成17年12月6日からは、神野新田町で観測が始められたが、それまでは、ここに有線ロケット気象計が設置され、降水量、気温、風向・風速と日照時間が豊橋市のデータとして計測され、まとめられていた。ここでは、降水量は昭和49年（1974）から、他の3項目は昭和51年（1976）から観測されている。

この10年間（1993～2003）のデータでは、年平均気温は16.4℃、最高気温は38.6℃（2001）、最低気温-4.9℃（1996）、年間平均降水量1642mm、最大降水量2108mm（1998）、最小降水量1354mm（2001）である。

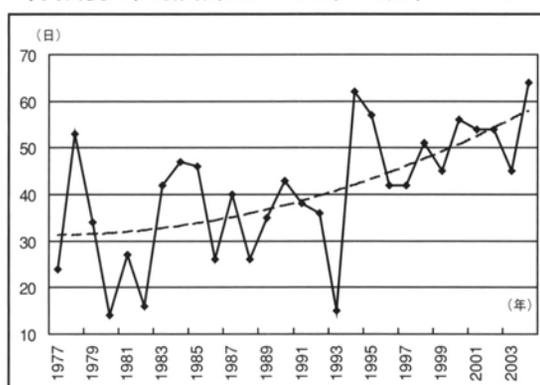
右に、年平均気温、真夏日、冬日の変化のグラフを示す。

これらから、この27年間に平均気温は約1.5℃上昇し、真夏日は20日ほど増加、冬日は20日ほど減少していることがわかる。地球規模で温暖化現象に対する取り組みが叫ばれているが、身近な観測地のデータからも若干ながらその傾向は読み取れる。思えば、私たちが子供の頃はもっと池が凍ったことが多かったのではないかと。私たちがまちを歩かなくなり自然と向き合う機会が減ったこともある。身近な自然に接し、身体で感じることを忘れてはならない。

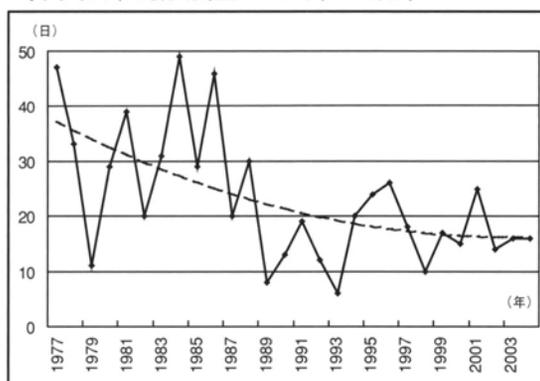
年平均気温の推移（1977～2004）



年間真夏日(日最高気温30℃以上)の日数(1977～2004)



年間冬日(日最低気温0℃以下)の日数(1977～2004)



**竜巻** 台風21号が東三河地域に最も接近した平成16年9月29日午後11時ころ小島町から大岩町にかけて突風が発生した。被害は7kmの帯状に発生し、屋根瓦が飛び散って損傷したり、倉庫やビニールハウスが全壊するなど大きな被害をもたらした。建物被害は全壊2棟、半壊10棟、一部損壊171棟の183棟に及び、建

物の損傷に伴い電線にも大きな被害が出た。二川町から大岩町、東高田町、大脇町、小島町の約2,600戸が停電となり、全面復旧したのは30日午前6時過ぎであった。

名古屋地方気象台では、被害状況から突風の原因を竜巻によるものと推定している。

### 3 二川南校区の移り変わり

#### (1) 二川の歴史

旧二川町 明治元年（1868）、二川村と大岩村は三河県の管轄下におかれ、翌2年から静岡藩に、4年から額田県に、そして5年には額田県を合併した愛知県の管轄となった。

明治11年、二川村と大脇新田が合併し、二川村となり、渥美郡役所が新設され、二川には戸長役場が置かれた。また、同年には雲谷村、中原村、原村が合併し、谷川村になっている。

明治22年には二川村は大岩村、谷川村と合併して大川村と称した。

明治26年には町制をしき、大川町となった。当時、渥美郡には豊橋町、田原町、大川町の三町があった。

明治30年には谷川村が大川町から分離、39年に、大川町、谷川村、細谷村、小澤村が合併して二川町となった。当時の二川町には、二川、大岩、谷川、上細谷、下細谷、小島、小松原、寺沢の字が記されている。同年8月豊橋町は市制をしき、渥美郡より独立した。その後二川町の行政区域の変更はなく、昭和30年（1955）3月1日に、面積42.65km<sup>2</sup>、人口14,386名の規模で豊橋市と合併し、今日に至っている。



昭和40年代二川のまちなみ

#### (2) 人口・戸数の推移

二川宿本陣資料館の資料による、記録に残る江戸時代の後半の家数・人口は次のとおりである。

年号（西暦）	家数（軒）	人口（人）
安永9年(1780)	299	1,157
寛政2年(1790)	272	1,075
享和2年(1802)	291	1,136
文政3年(1820)	306	1,289
天保3年(1832)	342	1,413
〃 9年(1838)	330	1,506
嘉永3年(1850)	332	1,481
文久元年(1861)	346	1,440
明治元年(1868)	340	1,365

寛政2年頃には、天明の飢饉などの影響で人口家数とも減少しているが、その後、次第に増加している。約90年間での増加は18%程度であった。

明治時代の渥美郡と豊橋市の人口は次のとおりである。

年号（西暦）	戸数（軒）	人口（人）
明治13年(1880)	17,579	84,607
〃 23年(1890)	17,918	96,357
〃 33年(1900)	20,316	111,292
〃 39年(1906)	23,808	122,702
うち豊橋市	9,900	37,635
〃 43年(1910)	26,763	137,280
うち豊橋市	12,372	47,344

この間、明治26年には、大川村は町制をしき、また、豊橋町は明治39年に市制をしき、渥美郡より独立し、豊橋市となっている。1910年までの30年間で、人口は約62%増加しており、特に豊橋市では、わずか4年間に約26%増加した。この間、渥美郡、二川町などでは、町村の分離、合併が幾度も生じたため、純粋な地区人口の変化を読み取る資料が不足

しており、大川町、二川町の人口動向は定かではない。

また、旧二川町（二川、大岩、谷川、上細谷、下細谷、小島、小松原、寺沢）の国勢調査による人口は、次のとおりである。

年号（西暦）	人口（人）
大正9年(1920)	10,830
〃 14年(1925)	10,960
昭和5年(1930)	10,816
〃 10年(1935)	10,088
〃 15年(1940)	10,125
〃 22年(1945)	14,753
〃 25年(1950)	14,860

二川の製糸業が盛んな大正末期頃には、女工さんが4,400人もいたと言われている。

### (3) 校区の変遷

**二川南小学校誕生** 二川南小誕生までには多くの人々の努力と長いみちのりがあった。

この地域の子供たちは二川小学校に通学していたが、距離が遠く不便で、「国道1号線より南に小学校を」というのが住民の強い要望であった。この要望を実現すべく地元の有志が立ち上がり、市当局の関係者と折衝や陳情を重ね、対策を講じてきた。

その頃、二川小学校は年々児童数が増加しており、子供たちは自由に運動もできない状況で「過大校を解消し、学校規模の適正化を図るために分離校を建設する。」という大義名分ができた。

当時、児童数は1,768名であったが、昭和55年（1980）6月によりやく過大校解消対策委員会が発足し、30学級以下という学校規模の適正化をめざし、二川校区が一丸となって取り組むことになった。

分離独立までの課題は多く、全校区民の同

意を得ること、校区の線引き問題、建設地問題などで大いに議論を呼び、賛否両論が渦を巻き当時の関係者は大変な苦勞をした。昭和56年1月、線引きは梅田川を基本に久保田、豊清を含むこととし、建設候補地は東西中間点の二川中学校周辺と決定され、用地確保に向けて建設促進部会を結成して活動を続けた。

新設校建設に携わった関係者は幾多の問題に遭遇しながらも現在の場所を選定し、難題を一つひとつ解決して昭和60年4月に地主との契約が完了した。市教育委員会はオープンスペースを持つ学校として校舎の設計に着手、昭和63年開校をめざし昭和61年に造成工事が始まった。

また同時に昭和61年に二川地区新設小学校校名選定委員会が組織され、地域アンケートを実施するなど検討を重ね、同年2月5日校名案を決定、その結果を受け昭和61年3月議会で校名が「二川南小学校」と決定された。

同年5月に二川南小学校開校準備委員会が総勢33名で結成され、開校までの準備や通学路の検討が開始され、同時に校区も「二川南校区」とすることが決定された。

こうして、昭和63年（1988）二川小学校と谷川小学校から分離し、二川南小学校が誕生した。



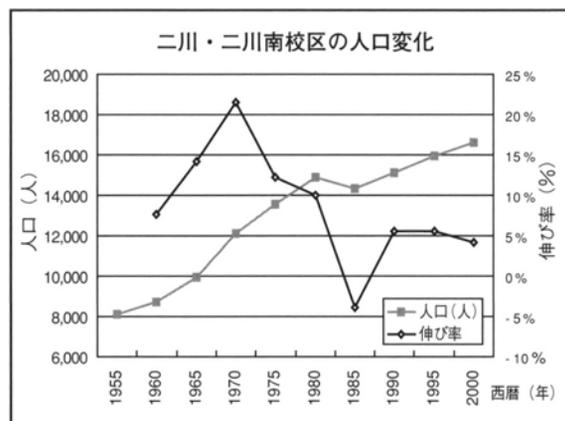
建設のすすむ小学校

二川地区の人口動向 行政課による二川・二川南校区の国勢調査人口（概数）は次のとおりである。

年号（西暦）	世帯数	人口（人）	伸び率
昭和30年(1955)	1,553	8,090	—
〃 35年(1960)	1,778	8,706	7.6
〃 40年(1965)	2,160	9,943	14.2
〃 45年(1970)	2,772	12,084	21.5
〃 50年(1975)	3,311	13,556	12.2
〃 55年(1980)	4,055	14,908	3.7
〃 60年(1985)	3,835	14,336	-0.4
平成2年(1990)	4,355	15,127	5.5
〃 7年(1995)	4,858	15,970	5.6
〃 12年(2000)	5,313	16,631	4.1

二川・二川南校区の合算人口

昭和35年から50年にかけての増加が顕著であるが、これは、大規模工場の進出による増加によるものと思われる。



二川南校区だけで見ると次のとおりで、平成2年からの10年間で、世帯数で706世帯、人口で1,303人、約20%増加している。

平成12年（2000）現在で、二川南校区は男性3,963名、女性3,912名で、合計7,875名、2,544世帯となり、人口は豊橋の小学校区で22番目となっている。ちなみに人口密度は830人/km<sup>2</sup>で37番目となっている。

年号（西暦）	世帯数	人口（人）	伸び率
平成2年(1990)	1,830	6,572	—
〃 7年(1995)	2,248	7,392	12.4
〃 12年(2000)	2,544	7,875	6.5

平成17年（2005）の国勢調査人口は、まとまっていないが、豊橋市が地域イベントの補助額算定に使用した平成17年4月1日現在の人口を紹介すると、世帯数2,983世帯、人口8,752人（5年伸び率11.1%）であった。

二川南校区でも高齢化が進んでおり、平成18年度の敬老会に招待された75歳以上の高齢者は男子245名、女子316名、合計561名となっている。

また、近年工場へ勤める外国人労働者が増加しており、本校区でも外国人が増えている。子どもたちの生活やスポーツなどを通し、地域で受け入れる土台を培っていくことも必要であろう。



梅田川沿いの住宅地

## 第2章 歴史と生活

### 1 二川南校区のあゆみ

#### (1) 古代より近世

**遺跡** 三河湾に注ぐ梅田川流域には、早くから人々が定住していたが、二川地区でも、大岩町本郷遺跡の存在によって縄文時代から人々が生活していたことがわかっている。

古墳時代には、本郷、二川、谷川古墳群など、6～7世紀の古墳群が存在していることから、周辺に人々が生活していたと考えられている。

奈良時代になると、二川は、渥美郡六郷のうちの高蘆郡たかあしに属していたとみられている。

平安時代には大脇荘（二川）、岩根荘（大岩）という荘園の名が見られる。

大岩町字本郷にあった本郷遺跡は、縄文時代の小規模な遺跡と考えられていたが、その後の調査により、中世の大規模な住居跡が発見されている。

また、この一帯は、陶器生産が盛んで、平安時代の初めごろ（9世紀）猿投窯さなげようの技術が伝わり、二川窯として10世紀から11世紀にかけて、最盛期を迎えた。その範囲は、大岩町、

東高田町、藤並町にわたっている。

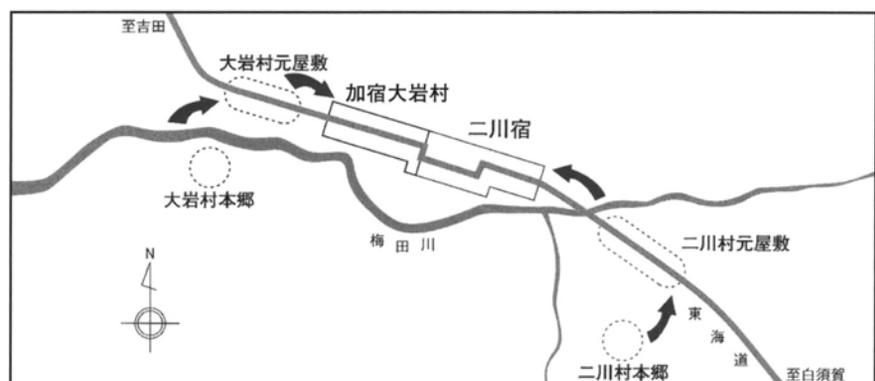
古くから、二川地区は三河国と遠江国とととうみを結ぶ交通の要衝であった。平安時代の東海道は、国府（豊川市）より渡津（小坂井町）を経て、豊川を渡り、二川近辺を通って遠江国の浜名橋へ出た。鎌倉に幕府が開かれてからは、鎌倉と朝廷のあった京都を結ぶ「鎌倉街道」としての往来がはげしくなった。

室町時代から戦国時代にかけて梅田川流域は、今川氏の支配下にあったとされる。

**村の移転** 近世になり、慶長6年（1601）に、徳川家康は、東海道宿駅制度を確定し、二川宿と大岩宿を設置し、人馬継立てを始めた。

二川村は、現三弥町字中原、大岩村は、現大岩町本郷にあった。二川宿のにぎわいに比べ、当校区にあたる地域は、荒れ地であり、人家も少なかった。

初め二川村と大岩村の二か村で一宿として業務を担当していた。しかし、交通量の増加のために負担に耐えかね、寛永12年（1643）徳川幕府は両村を直轄領としたうえで、二川宿と加宿大岩村からなる宿場とした。



## (2) 近代～明治から昭和

**発展を支えた製糸業** 明治の初め、士族のための事業として蚕糸業が注目された。細谷町の朝倉仁右衛門が明治9年(1876)豊橋で製糸を始め、明治15年に上細谷村に細谷製糸会社を設立した。また、二川では良質な繭を求めて立ち寄った小瀬志ちを製糸技術習得のため慰留し、志ちは明治12年、二川に製糸工場を始めた。苦勞の末、それまでくず繭とされていた玉繭から糸を取り出すことに成功し、明治20年代半ばには、玉糸生産を専業とした。昭和初期には全国生産の半数以上を占めるようになり、二川は玉糸のまちとして知られるようになった。



糸徳社で働く女工さん

**開拓と歴史** 梅田川と落合川の流域には古代より人々が定住し、水田や畑がきりひらかれ、人々が生活していた。しかし、二川宿の南方の丘陵地帯(向山と呼ばれている)は、天伯台地上にあるが、水分が乏しく、農業には厳しい条件となっていた。そのため溜池を造成し、農耕を行ってきたが、生活は厳しかったようである。

三ツ家には、約700年ほど前から人々が定住していた。本格的に台地開墾が行われるようになったのは、昭和の初めからである。

豊清地区は、明治26年(1893)に斉藤清助によって開拓が始められた。しかし、営農はうまくいかず苦勞した。その後、各地から開

拓者が移り住み、厳しい条件の中で協力団結し、今日に至っている。

一里山、比舎古は大正5年ごろより開拓が行われ、昭和20年から入植者が増えた。

昭和4年に二川町は、前荒田、東荒田、西荒田、久保田、大穴、一里山、北裏の御料地200ヘクタールの払い下げを受け、開拓希望者に分けた。昭和7年には、県の指導により弥栄の開拓が始まった。

## (3) 戦後そして平成へ

**開拓農業** 戦後、国は県と協力して昭和20年まで陸軍の演習地であった天伯原の開拓に乗り出した。県で開拓者を募集したところ、約1,000人の人々が集まり、いくつかの開拓組合を作り協力して開拓に取り組むこととなった。二川開拓組合もそのひとつで、その中には豊栄・陸美・蛭茂・縄口の4つの集落が含まれていた。

豊栄の集落には、広い土地を求めてやってきた北設楽郡豊根村出身の人が多くいた。人々は、朝暗いうちから開墾を始め、夜遅くまで続けるという苦勞を重ねた。昼は人夫に出て生活費を稼ぎ、夜は月明かりの下で開墾をすることもたびたびあった。開墾した畑には、食料となるさつまいもや小麦が作られた。しかし、酸性のやせた土地であったため、作物はほとんど採れなかった。そこで、土地を肥やすために、人々は手車を引いて二川や豊橋の町へ生ごみや下肥を集めに行き、畑のたい肥にした。また、土をよくするために、国や県からは、石灰などの配給を受けた。開拓農協では、名古屋市などからトラックや車で、たくさんのごみを肥料として運び入れた。このような努力により、土地は少しずつ肥えていき、作物がよくとれるようになった。

また、開拓地は台地であったため、水の確保が課題であった。度重なる水不足のため、

豊清や三ツ家などでは、昭和23年に灌漑用の掘りぬき井戸を作り、田に水を引いた。しかし、農作業に使えるほど十分ではなかった。

そこで、昭和24年（1949）国と県が協力して、豊川用水を引く工事に着手した。用水路工事と併せて田畑を整備したり、道幅を広げたりする工事も行われた。豊川用水は19年の歳月と500億円もの費用をかけて、昭和43年（1968）に完成した（二川地区は昭和41年に部分通水）。豊川用水から豊かな水が供給されるようになると、農業のやり方も変わってきた。さつまいもや小麦などに代わって、収入の多いキャベツや白菜、にんじんなどの野菜が多く作られるようになった。



東細谷町の豊川用水

二川南校区の農業はこのように発展していったが、現在豊栄地区では、大きな温室団地が作られ、資源化センターに集められたごみの焼却熱を利用して、トマトやメロンなどの早作りが行われるようになった。

**工場誘致** 戦後、国道1号線沿いに工場誘致がすすめられた。昭和35年（1960）伊藤ハムが進出、さらに、昭和37年日東電工、昭和38年京都ダイカスト工業（現アーレスティ）、昭和40年神鋼電機といった企業の大工場が次々と進出した。これは、国道の利便性に加え、広い土地が確保できることなどがあげら

れ、これら企業の進出により、二川地区に住宅、社宅が建設され、人口が増加することとなった。

**教育文化施設** 教育・文化の拠点として二川地区には、昭和45年（1970）に豊橋子供自然公園（動物園）、昭和55年に地下資源館、昭和63年に自然史博物館が開設されている。また、平成3年（1991）には二川宿本陣資料館が開設、動物園は平成4年に豊橋総合動植物公園としてリニューアルされた。このように、二川地区は、豊橋市の教育、生涯学習の拠点的な地域となっている。

**二川駅周辺整備** 豊橋市は平成10年、二川駅周辺整備事業に着手した。老朽化した駅舎の建替えとともに、人口増加の著しい二川駅南部方面への利便性を高めるため、南口を設置することを目的としたものであった。



改築前の二川駅（北口）

事業は、橋上駅舎、南北連絡通路、南口広場、南口自転車等駐車場、北口広場と、二川南駅前通などからなり、平成16年3月に完成した。この事業の完成により、鉄道をまたぎ二川駅へ行くことを強いられていた私たち校区の住民にとって、大変便利な駅に生まれ変わり、総合動植物公園までの快適な空間が生まれた。



二川駅南口



動物や恐竜がいるゆとりある歩道

国道に架かる歩道橋は、市内2番目のエレベータ付き歩道橋であり、南口広場や道路には、恐竜や動物のモニュメント、季節の花々を植えた鉢などが飾られ、駅から総合動植物公園へ向かう利用客が楽しめるように工夫されている。



歩道橋の下では象の親子もお散歩

#### (4) 今後の校区

**くらしの環境整備** 二川南校区は、国道1号線の利便性から工業を中心として発展し、また従業員の生活の場としての宅地開発も進んできた。そのため、比較的若い世代が多く住む地区であった。

今後の校区の生活環境を考えると、まず生活基盤としての道路整備があげられる。校区には少ないながらも南北に幹線道路が通っているが、国道1号線を除いては東西を連絡する広い道路がない。そのうえ通勤車両が抜け道として通過しており、通学路の安全性に不安がある。校区の南では国道23号バイパスの整備が進められており、国道1号線の交通量は減少するものと考えられるが、やはり地区内幹線道路としての東西連絡道路は必要である。

次に、現在梅田川北部の二川校区を中心に進められている下水道の整備が課題としてあげられる。ただし、市街化調整区域の住宅も多いため、合併浄化槽と併用することも考えていかねばならない。

さらに、比較的住民の年齢層が若かった地区も次第に高齢者が増えてきており、高齢者活動の場の確保が課題となってきている。そのため、校区市民館のほかに、もう1つ集会室や娯楽室、図書館などを備えた複合型施設の建設が望まれる。

また、校区内には多くの川やため池などの水辺がある。この貴重な自然環境を生かして大岩町の反茂池で周辺住民の希望を取り入れた「いこいの池整備事業」が進められている。多様な生物が生息するため池の自然を確保しながら、人々が豊かな自然とふれあう親水環境を整備しようとするものである。

生活にうるおいとやすらぎをもたらす緑豊かな自然環境の保全も今後の大切な課題である。

## 2 二川南校区の産業

### (1) 農業

**盛んな農業** 豊橋市は農業の盛んな地域で、市町村別の農業産出額では、田原市とともに全国有数となっている（平成16年田原市1位、豊橋市5位）。現在の豊橋市の農業産出額は513億円で、愛知県の15.7%にあたる。

二川南校区も農業の盛んな地域であるが、農業生産物は、食生活が豊かになるにつれて変化してきた。昭和20年代にはさつまいもの栽培が盛んであったが、昭和30年代になるとキャベツなどの栽培が増加していった。その後、昭和41年、豊川用水の二川地区一部通水に伴い、野菜指定産地生産出荷近代化推進事業の実施によって、補助事業でスプリンクラーが導入され、露地野菜を主体とした農業の近代化が進められた。

現在では、露地は秋冬期のキャベツ、はくさい、ブロッコリー、サニーレタス、さやえんどう、夏期のたまねぎ、とうもろこし、お茶、施設はミニトマト、メロン、ぶどうなどの果実類とデルフィニウム、バラ、スイートピーなどの切花類の栽培が盛んである。畜産も肉牛、酪農、養鶏、うずらなどが盛んである。

豊橋市の主な農産物出荷量と全国における占有率は次のとおりである。

豊橋市の農産物出荷量（平成16年度）

農産物名	出荷量 千トン (全国における占有率)
キャベツ	68.7 (6.2%)
はくさい	16.6 (2.5%)
トマト	10.4 (1.6%)
たまねぎ	3.2 (0.3%)
ブロッコリー	2.0 (2.6%)

### サニーレタスの創造者

～大岩町西荒田 朝倉昭吉さん～

朝倉昭吉しょうきちさんは、反茂池の南で農業を営み白樺しらかばメロンやサニーレタス、ウイキョウなどを栽培している。

昭吉さんは、2002年秋、農業者では初めての黄綬褒章を受賞した。この章は、業務に精励し、人々の模範たるべき者に与えられるもので、県や市の関係者、地域はこの栄誉を称え、喜びに湧いた。

仲間とともにサニーレタスを栽培し、サニーレタスの名称を考え、全国に普及させた功績が認められたのである。

昭和40年代、キャベツ、ニンジン、ジャガイモ、メロンの生産に明け暮れた昭吉さんは、方向転換を考えるようになった。そして、食生活の変化や料理の洋風化、外食産業の伸びなどから時代に合った洋菜類、サニーレタスなら絶対に当たると確信したのである。

この先見性と粘り強い追求心が成功の鍵であった。昭吉さんの呼びかけでサニーレタスの栽培を始めた豊橋南部農協は1971年に東京へ初出荷し、それ以後全国に広がっていった。

豊橋はどこよりも早く手がけた先行メリットを生かすことができ、地域の農業の発展に大きく貢献したのである。

昭吉さんは、「一番大事なのは、農業は一人ではどうにもならないってこと。ゼロから出発する場合、まとまった集団で取り組まないと成功しない。集団を生かすためには、私自身が私利私欲を離れることが第一だった。」と語っている。サニーレタスの名称も、自ら考案した包装用具の権利も自分のものにしなかったことが普及の第一歩になったと自己分析し、今も全国各地の指導に出かけている。サニーレタスは朝倉昭吉さんの生きてきた足跡を物語る野菜になった。

## (2) 商工業

**少ない商業施設** 校区内に商店は少ない。生活用品の多くは二川校区の商業施設に買い物にいく人が多い状況である。

**工業** 一方、工業は豊橋市内の中では盛んな校区と言える。平成16年の工業統計調査では、事業所数では吉田方（77事業所）、大崎（69事業所）、二川南（68事業所）の順で3番目に多い校区となっている。従業員数、製造品出荷額では、大崎（8,507人、5,285億円）、谷川（2,832人、1,401億円）、二川南（2,295人、703億円）と、いずれも第3位となっている。国道1号線に沿って神鋼電機や、本多電子、アーレスティ（旧京都ダイカスト）などの工場があるほか、中小の工場も数多く分布している。本多電子は昭和31年に創立され、昭和53年に大岩町に本社工場を移転してきた。超音波科学館も本社内にある。

二川南校区は、市街化区域でも工業地域（神鋼電機周辺）や準工業地域の指定が多いため、中小の工場や住宅が混在している。また、市街化調整区域でも養鶏場などの跡地が住宅として開発され、湖西市や谷川校区などの工場に勤める人たちが増えて人口も年々増加している。

**豊橋の匠** 市内の卓越した技能者を顕彰する豊橋の匠に校区から2人が認定されている。株式会社大岩の林雄三氏は、鑄造並びに肉盛溶接に卓越した技能を有し、その金属溶射の技術が評価されたことから平成12年（2000）に、また、木地師として木工業を営む大蔵工房の大蔵節次氏が、優れたロクロ挽きの技術とデザインに優れた製品を生み出していることが評価され、平成15年にそれぞれ認定されている。

熟練の技を持つ方々が地域にあることは、校区の誇りである。

**豊橋総合動植物公園** 商工業施設ではないが、校区内には豊橋総合動植物公園がある。動植物公園は昭和45年（1970）に豊橋子供自然公園としてこの地に移り、その後営林署の土地を譲り受け拡張してきた。平成4年には総合動植物公園となり、平成17年7月には総合動植物公園になってから1,000万人の入場者を数え、年間60万人を超える人が訪れている（平成16年度、613,817人）。

豊橋の動物園の歴史をみると、明治32年（1899）豊橋駅前に安藤動物園が開園、その後現在の松葉小学校付近に移転したが、昭和7年（1932）に豊橋市営となり、昭和9年には、現在交通児童館のある向山町に移転した。戦争で昭和20年（1945）に閉鎖されたが、昭和29年再び、豊橋公園で開園した。

昭和40年代に入ると生活文化の向上に従って観光施設の整備拡充計画が進められ、都市化で自然に親しむことが少なくなった子どもたちに、今までよりも広い動物園をつくる計画を立て、新動物園の用地を探した。候補となったのが現在地である。林野庁所有の二川苗圃<sup>びょうほ</sup>と隣接する民有地の合計121,000㎡を買収し、昭和45年（1970）8月1日、豊橋子供自然公園がオープンした。広大な用地を生かし、林の中に遊歩道や広場をつくり、ライオン、トラ、クマなどは堀を設置し、檻<sup>おり</sup>をなくして見られるようにした。園内の自然なままの大沢池には鳥類を放し飼いにし、可能な限り自然な状態が演出された。また、子供動物ランドには、カブトムシやカマキリ、テントウムシ、電話機などを型取った大型コンクリート遊具を置き、話題を集めた。遊具の中に入った子供たちがアリになったような視点で遊べるというものであった。

昭和63年（1988）には自然史博物館がオープンした。広い前庭には大きな恐竜が設置され、博物館に入るとティラノサウルスが入園

者に向かって叫び声をあげる。入園者は光と映像によるタイムトンネルを通して恐竜の棲む中生代に進み、アトサウルスの化石を見ることができる。この建物はテーマパークのはしりのような機能を持っており、爆発的な人気を呼んだ。この建設を契機に豊橋の動物園は従来の動物園という概念を越えた巨大な総合公園へと変身していった。



自然史博物館

平成4年(1992)、豊橋市制80周年事業として、総面積39.6haの豊橋総合動植物公園を一次オープンした。園内は大きく動物園、遊園地、自然史博物館の3つのゾーンに区切られ、アフリカ園、展望塔、遊園地、憩いの広場が拡張整備された。さらに、平成6年には、なかよし牧場と野鳥園が、平成8年には温室、屋外植物園がオープンし、豊橋総合動植物公園は広さ、施設、内容どれをとっても日本有数の公園になった。

植物園には、当時の高橋市長がフランスを訪れた際に、クロード・モネのアトリエから睡蓮が寄贈され、日本初の「モネのスイレン」として植物園開園に一層花を添えることとなった。

平成18年には、クロカンガルーやケナガワラルー、エミューを混合展示し、空中のデッキから観察できるオーストラリア園をオープンし、現存する世界最古で、自然界にはオーストラリアの自生地には100本余りしかない希

少な植物であるウォレマイ・パインを記念植樹した。これは、2億年前のジュラ紀に存在していたことから、通称ジュラシック・ツリーとも呼ばれ、古生物学者が、「恐竜がこの葉を食べていたであろう。」という貴重な植物である。

また、100周年事業のひとつとして、平成17年の愛・地球博で展示された冷凍マンモスを自然史博物館に展示し、多くの人を楽しませた。

### (3) 交通網

江戸時代までの交通は徒歩が中心であった。地域の道といえば、東海道が白須賀から二川を通り、火打坂を越えて飯村に抜けていた。この東海道や二川宿に向かって何本かの道路があったようである。廃藩置県後の明治6年(1873)には東海道は一等国道と位置付けられ、道幅7間(約12.7m)と修築規則(大蔵省)に定められた。明治11年には火打坂を改良し、約1.7km、幅約12.7mの新しい道路ができた(岩屋下と思われる)。

そして、昭和12年には二川地域の国道1号線の工事に着手し、現在の国道の形ができた。

昭和35~36年にかけては、新二川跨線橋の工事が行われている(岩屋町)。

4車線となったのは昭和55年頃であった。



拡幅前の小山塚歩道橋(現在は地下道)



4車線化の工事が進む国道1号線

国道1号線の交通量は、昭和13、14年の交通量調査では、愛知、静岡県境で1日平均116台であったが、平成18年3月の交通量調査では、東細谷町字境川で26,950台であった。

2005年3月に静岡県の4バイパス（藤枝、掛川、磐田、浜名）が無料開放され潮見バイパスを経由して校区の国道1号線に流入する交通量が増えている。23号バイパスの早期開通により校区内の国道1号線の交通量が減少することに期待する。

東海道本線は豊橋駅が明治21年に開業、二川駅は明治29年の開業であった。

二川駅は東海道本線で一番古い駅舎として当時の面影を残していたが、平成10年～15年までの二川駅周辺整備事業で生まれ変わった。



改築前の二川駅構内

二川駅にはそれまで北口しかなく、私たち二川南校区の人は迂回して駅を利用していた。また、駐輪場も民間の自転車預り所が北口に

しかなかった。

二川駅周辺整備事業では、二川駅の改築、駅前広場の建設と二川南駅前通の建設と国道1号線に架かる歩道橋が建設された。

さらに、公共自転車等駐輪場と10台の時間貸し公共駐車場を設置し、また、梅田川沿いの道路も整備された。北口広場の改修も行われ、現在では北口にも民間時間貸し駐車場ができています。



南口広場では恐竜がお出迎え

昭和47年までは、国鉄バス、遠鉄バスが二川のまちを走っていた。豊橋駅から岩屋下経由と東山経由で二川駅を通過していた。また、二川駅から二川のまち、二川中学校の横を通り、小松原町まで行くバス路線や、三ツ家、細谷を通り、白須賀へ行く路線もあった。その後、バス利用者の減少などから小松原線、細谷線は昭和61年に廃止され、二川バイパス開通後、昭和55年には、二川のまちからバスの姿が消え、バイパス、神鋼電機前を経て新居町までの路線が運行されるようになった。さらに、平成14年には国鉄バス路線は廃止され、豊橋鉄道のバスがこれに代わって運行されるようになり、現在に至っている。通学1便、帰宅2便が一里山まで運行しているが、利用者も少なく再三廃止が検討されてきたが、学校と地域の強い要望で今のところ存続されている。

### 3 校区の活動

#### (1) 校区総代会

二川南校区は昭和63年に二川校区から分離して誕生した。昭和62年の町内会は9町で、総代会は大岩南・鈴木正雄（初代会長）を中心に本郷・林幸男、南丘・久保富次、久保田・宇藤隆一、豊栄・中村巳太郎、二川南町・佐々木馨、三弥・内藤武治、弥栄・小塚一の各氏であり、基礎づくりには大変な苦労があった。

総代会を中心に開校準備委員会委員や関係者は連日のように会合を重ね、二川南小学校の開校および校区の創立、二川南校区市民館開館など山積する多くの課題と取り組んだ。

そして、学校備品充実のために篤志寄付を募り、校区の人々の協力で700万円余の寄付金が集まった。

そして昭和63年4月2日、二川南小学校の開校および校区市民館開館と共に二川南校区が誕生した。

市内50番目の小学校として誕生した二川南小学校は、市内最初のオープンスペースを持ち、立派で斬新な校舎は、まさに21世紀に羽ばたこうとする二川南校区の象徴であった。

苦節十数年、新しい地域づくりと未来を担う子供たちの育成に夢と希望を託し、東奔西走して尽力された先人と関係各位、物心両面で惜しみなく協力してくださった地域の皆様の総意が結実した記念すべき日であった。



開校式で校旗を掲げる三田校長

昭和63年度から発足した二川南校区総代会は旧二川校区の運営を踏襲してスタートした。

発足以来数年間は分離独立した新しい校区の基盤整備に各種団体と協力して取り組んだ。

当時は校区内の世帯数が急増しており、開校と同時に小学校の校舎増築の必要に迫られたり、懸案の通学路の整備問題やコミュニティ推進の課題などが山積し、総代会は行政機関や各種関連団体と連絡調整をとりながら校区づくりの中心となってきた。

その主なものをあげると次のとおりである。

- ・平成2年、小学校校舎増築（6教室、家庭科室、保健室）、文化協会設立。
- ・平成3年、小島町西縄口が大岩南の行政区に編入、二川宿本陣まつり大名行列参加、敬老会の主催を総代会から社会教育委員会に移管、ピンカンボックス設置モデル地区の指定。
- ・平成4年、納涼夏祭り開催、二川南小学校区青少年健全育成会結成。
- ・平成5年、市民総踊り参加、県より家庭教育推進校区の指定、市より交通安全推進モデル地区の指定。
- ・平成6年、校区資源回収予定カレンダー第1号配布。

これらの活動を着実に推進するなかで最も苦慮した課題は交通安全と防犯である。

校区内に国道1号線が走り、これを横断するために登下校する児童生徒を含む歩行者は地下道を通っていたが、ここが暗く、落書きの絶えない防犯上も危険な状態になっていた。そのため総代会副会長（防犯協会長）であった瀬戸正が中心となり、建設省岡崎国道維持出張所や市道路維持課と折衝、平成4年、補修工事と防犯灯、防犯ベルが設置された。そして健全育成会と家庭教育推進委員会が母体となって地下道の壁画製作が行われた。小学校の児童と教師、PTA、老人クラブなど地域の

人々が一体となって2年にわたり製作を続け、平成5年1月に完成した。

当時ユニークな企画としてテレビや新聞で報道され社会的反響を呼び、健全育成会が建設省名古屋国道工事事務所長より表彰された。



地下道の壁画製作

平成7年、大岩南を3分割し、現在の大岩町南1区、大岩町南2区、大岩町南3区とし、校区総代会は9町から11町となった。

校区総代会は「みんなで創ろう二川南」を合い言葉に校区の活性化と発展を図ってきたが、平成7年、二川南校区コミュニティ推進運営委員会を結成し、校区の様々な事業の運営や課題を話し合い、一致協力して地域づくりを進める体制を整えてきた。これに所属する団体は総代会、社会教育委員会、社会体育委員会、老人クラブ、更生保護女性会、消防団、子ども会、民生児童委員会、文化協会、PTA、女性部会、青少年指導員、青少年健全育成会である。

コミュニティ推進運営委員会はこれらの団体の代表者と小学校の校長、教頭を加えて開催され、この会が健全育成会役員会を兼ねて小学校を支援している。

プール開放や納涼夏祭り、市民総踊り参加の企画・運営をはじめ敬老会、成人式の準備など各種団体が一致協力できる体制は全市に誇りうる仕組みである。

### 【10周年記念行事】

平成9年11月16日、二川南小学校・二川南校区創立10周年行事が実施された。10周年を記念し、市長をはじめ多くの来賓、歴代校長や教職員、各種団体・PTAの歴代関係者を招き、記念式典と記念行事を実施、総代会をはじめ学校、PTA、地域が一堂に集い、さらなる発展を誓い合った。同時に、学校と校区の10周年記念誌「二川南」を発行した。

### 【交通網の整備】

本校区は東部方面の多くの大企業に加えて中小企業の進出も多く、総合動植物公園や二川駅へのアクセス、国道1号線の渋滞緩和、生活道路の拡幅、通学路の整備など、交通網の整備が最大の課題である。

総代会はこれらの課題解決に向け、二川校区や谷川校区等と協力して真剣に取り組んできた。その主なものは次のとおりである。

#### ①二川駅周辺整備事業

平成6年、JR東海へ二川駅改修を陳情し、これ以降、総代会は二川駅舎とその周辺整備、国道1号線拡幅と歩道橋設置、南駅前大通りと橋の新設等について国・県・市の関係当局と毎年、粘り強く折衝した。

平成11年には橋上駅舎、連絡通路の建設が開始され、さらに駐車場の建設やアクセス道路の改良整備など地元の要望を数多く取り入れた整備が進み、一部を残して平成15年3月、豊橋市の東玄関にふさわしいJR二川駅舎と駅周辺整備事業が完成した。

#### ②道路整備

平成12年4月、県道小松原・二川停車場線の道路改良工事、三弥町から二川南町を結ぶ「くらしの道づくり」及び道路改良、沢渡池東道路の改良と歩道設置について要望書を提

出、関係当局と折衝している。

平成13年、沢渡池東道路の改良と池敷を利用した歩道が完成、また、弥栄町より三弥町の中池、上池を通る通学路の整備も完成し、児童生徒の登下校の安全が確保された。

平成17年にはJR大岩踏切の拡幅、宮川橋の拡幅と周辺道路の改良工事が完成した。引き続き、大岩踏切から国道1号線までの拡幅と南へ600m程度の早期実現を折衝中。

平成18年には、通学路として、沢渡池北側の道路が、歩道と車道に段差をつけて整備された。



沢渡池北の歩道

### ③地域懇談会

平成14年8月「地域懇談会」が開催された。市側から市長、企画部長、建設部長、上下水道局長、消防長、教育部長、総務課長、広報広聴課長を招き、各町総代・副総代、各種団体代表、小学校教員等約50名が参加し、校区のさまざまな課題について懇談した。主な内容は校区内の幹線道路の整備、下水道の整備、生涯学習関連施設の配備、小学校の校舎増築、自主防災会に関わる諸問題についてであった。その結果、駅南口周辺の梅田川堤防道路や国道1号線北側の市道が改良され、豊栄・大穴・本郷線が改良中である。また、校舎増築については、「道路整備は2～3年待てるが、学校は1年が大きい。今後検討してみたい。」という市長の言葉により大きく前進し、平成

17年度6教室が完成した。

### ④新国立病院へのアクセス

平成16年、新国立病院への交通アクセスに関する要望書を隣接6校区の総代会で提出した。豊橋医療センターの開設はこの地域住民にとって朗報であるが、火打坂線の拡幅、二川駅からのバス路線等の確保、各地域からのアクセス手段の検討はこの地域の緊急の課題である。

### 【教育・文化の振興と環境整備】

校区総代会は創立以来、子供の教育を託している小中学校との連携や支援、文化活動の振興、住みよい環境整備などにも健全育成会や各種団体と協力して取り組んでいる。主なものは次のとおりである。

#### ①学校夢づくり推進事業（二川南小学校）

平成13年豊橋市教育委員会の学校夢づくり事業に学校が子供たちのアイディアを集めて応募し選考された。「荒田池ネイチャーランド」大改造プランである。荒田池は学校隣接の池で、平成3年に大規模な改修をし、子供たちが学習や遊びに活用していた。平成11年にアヒルやアイガモを放し、自然観察や動物愛護の心を養ってきた。池が約700㎡、池畔・広場などが2,000㎡で、南側広場には樹木がある。子供たちの夢は「橋を架けてほしい」、「ヤギ小屋を作って」、「水生植物を植える」、「ベンチがあるといい」、「たんぼをつくる」などであった。

学校と総代会が中心となり、事業計画をつくり、各町のボランティアの手で、約3ヵ月をかけて子供たちの夢を実現させた。現在もネイチャーランドの環境整備や動物の世話、たんぼの稲作の世話を善意あふれるボランティアの方々が続けている。



もりもりんこ田んぼ 荒田池

## ②中学校の環境整備

学校の要請を受け、平成13年運動場南の駐車場を拡張整備。校区ボランティアの人々が林の樹木を整理伐採し、駐車場に土砂を入れて拡張、防犯灯を設置した。

平成15年、研究発表会を控えて3校区総代会の協力で、校庭及び運動場周囲の樹木を剪定、体育館壁面などの塗装作業をPTAと合同で実施した。また、3校区総代会と学校で要望書を平成14年に提出した、門扉の新設、フェンス工事、排水路の改修や駐車場の舗装整備が完成。これを受け、ボランティアの人々で駐車場のライン引き、花壇の整備等を実施した。

その後もボランティア活動は現在まで継続され、いこいの森づくりや水路の整備、温室の設置、樹木の剪定などが行われている。

## ③東部地域スポーツ広場の建設

豊橋市の第4次基本構想で、市の東西南北4箇所に大型地域スポーツ広場を整備する構想が示された。生涯スポーツ社会の実現をめざし市民がそれぞれの地域で、気軽にスポーツを楽しめる拠点を建設しようという計画である。

東部地域の候補地として、三弥町の市有地

が挙げられた。ここは約20,000㎡あり、そのうち約5,000㎡は平成10年より暫定広場として活用されている。

平成13年7月二川、谷川、二川南、小沢、細谷5校区の総代会は、早期実現の要望書を提出し、平成14年3月東部スポーツ広場推進協議会を設立した。5校区の総代会、体育委員会などから委員(委員長後藤文一郎)を選出し、現地視察や協議を重ね、地元の要望事項を集約し計画図面案を作成した。

三弥町役員会にこの案を説明し、三弥町の意見を集約した後、スポーツ課に提出した。

平成15年度末、5校区総代会は、再度早期建設の要望書を提出、平成16年度より現況測量が行われ、地元の理解と協力を得て、建設が進められる予定である。

## 【二川駅周辺整備事業完成記念行事】

平成15年3月30日(日)、JR二川駅舎及び駅周辺整備事業完成記念「のんほいパークふれあいフェスタ」が盛大に開催された。

整備事業の完成により、駅と総合動植物公園が直結され、地域の環境が美しく見事に整えられた。これに感謝し祝うとともに、地域と動植物公園が一層発展し活性化することを期して、二川、谷川、二川南3校区と市の関係各課が共同して官民一体のイベントを実施したのである。

記念式典は、3校区の総代会と各種団体、幼・保、小中学校に市の建設部、産業部と動植物公園、自然史博物館、みどりの協会で行委員会を組織し、会長を半田恭太郎(二川南校区総代会長)が、企画委員長を藤城和彦(同副会長)が務め、約260名の人々が運営委員として携わったスケールの大きな行事であった。



恐竜の登場

当日は国土交通省、県建設部、市役所関係各課、豊橋駅長をはじめ国会議員、県議員等も来賓として多数参加し、駅前広場での「記念式典」、「恐竜モニュメント除幕式」から始まり、南駅前大通りでの「祝賀パレード」、国道1号線での「横断歩道橋開通式」、総合動植物公園での「のんほいパークふれあいフェスタ」と続き、3小学校の鼓笛隊や消防音楽隊のパレード、奴踊り保存会の演技、二川中学校吹奏楽部の演奏などがにぎやかに行われた。



盛大な祝賀パレード

当日は天候に恵まれ、参加した地元住民は約4,200名であったが、祝賀ムードに包まれ、1日を家族や友達と楽しく過ごすことができた。

また、このイベントの実施で3校区の交流が一層深まり、地域の発展のために広く二川

中学校区でさまざまな課題に取り組んでいくという気運が高まったこと、市当局や関係者に二川地域の活気と結束力を示せたことが何よりの収穫であった。

#### 【安心・安全住みよい地域づくり】

地域住民の安全を守るために総代会は防犯、防災、交通安全に力を注いでいる。

防犯の集い、校区防災訓練を毎年実施し、防犯パトロールの体制を強化して校区を巡視し、各種団体と協力して交通監視活動を実施している。

平成16年9月29日、午後11時竜巻が発生。小島町方面から中学校西側の住宅密集地を襲い大岩寺付近へと通り抜けた。

直ちに消防団が出動、校区防災会も対策本部と避難所を開設して対応した。全壊2戸、半壊10戸、瓦、窓等の破損が171戸、負傷者数名と大きな被害を被った。

このような災害や予測される東海・東南海地震等に対する備えと訓練を徹底するよう各町ごとに防災講習会や避難訓練を実施している。

校区民が安心して生活できるように、災害に備え防災意識を一層高めるとともに、東西に広がる校区全体の安全確保に向けて、東部、南西部に防災拠点となる防災倉庫や避難所を確保していくことも課題である。



防災講習会

## 【とよはし100祭地域イベントの開催】

### エンカレチふたなんフェスタ2006

#### (1) 企画・運営

豊橋市は市制施行100周年を記念し、小学校区ごとに地域の特性をいかしたイベントを実施することとした。

二川南校区は、平成17年7月1日、実行委員会を組織し、10名の企画委員を選び、イベント開催に向けての準備を始めた。

校区は2007年に創立20周年という節目の年を迎える。この校区で暮らし、働く校区民が元気を出し、活気のあるまちづくりを目指し、豊かで住みよい地域を自分たち自身の手で創造していかなければならない。

総代会をはじめコミュニティ推進運営委員会に所属する各種団体とそのOBや各町の役員など420名が実行委員となり、小中学校の全面的な協力を得て準備を進めた。

そのイベントの名称が  
エンカレチふたなんフェスタ2006で  
「二川南を元気にしよう！」  
「勇気づけよう！」という企画であった。



#### (2) 内容

事業内容は例年実施している校区夏祭りを核としたもので、次のとおりの計画を立て、各種団体が責任を分担して開催にあたった。

#### 第1部 8月5日(土)

- ①お楽しみ縁日・屋台村 (～6日)
- ②特設ステージ バンド演奏・和太鼓・踊り
- ③皆で踊らナイト 校区民総踊り (～6日)
- ④お楽しみ抽選会
- ⑤ふたなん美術博 (～6日)

#### 第2部 8月6日(日)

- ①新鮮朝市
- ②フリーマーケット
- 福祉施設・授産所・PTA即売会など
- ③遊びの広場 昔なつかしい遊びの体験
- ④炎の舞 手筒・ナイヤガラ・乱玉
- ⑤特設ステージ プロ・バンド演奏
- ⑥キャンドルナイト など

#### 第3部 8月19・20日

- ①オールナイトソフトボール
- 19日19:00～20日7:00まで



ふたなん美術博

このオリジナリティ溢れるイベントは、3日間で述べ約6,500人の校区民が参加し、大変なにぎわいであった。

総額200万円(市補助金60万円)を費やしたこの事業は、校区の人々の心に「愛」と「ふれあい」の大切さを伝え、連帯意識を醸成することができた。

## (2) 青少年健全育成会

次代を担う子供たちを健康でたくましく、賢く育てるためには学校と家庭、地域がそれぞれの役割や責任を自覚し、三者が連携して子供たちを護り育てる組織や活動が大切である。二川南小学校区青少年健全育成会は平成4年6月6日に結成大会を開催、初代会長に工藤恒喜が就任（H4－H6）し、現在の基盤を築いた。その後、半田恭太郎（H7－H10）、藤城和彦（H11－）に受け継がれ、着実な活動を展開している。

1年間の主な事業は、

- ①青少年健全育成会総会 4月
- ②役員会 年6回（コミュニティ推進運営委員会）
- ③広報紙「ふれあいふたなん」年3回発行
- ④健全育成会資源回収 3月

などである。また校区内の川や池などの危険箇所や交通事故防止の看板の設置、子供たちが携帯する防犯ブザー購入の補助をしている。

これまでの主な業績は次のとおりである。

- ・平成5年 国道1号線地下道の整備と壁画完成、子ども会を中心に清掃活動開始。
- ・平成6年 建設省名古屋国道工事事務所長より地道な清掃活動に対して感謝状受領。
- ・平成14年 二川中学校及び二川、谷川、二川南小学校区が連携して「二川子どもを護る会」を結成。青少年の非行や事故防止、子どもを狙う悪質な犯罪から子どもを護る活動を広範囲の地域ぐるみで展開。
- ・平成16年 「二川子どもを護る会」が豊橋市長、豊橋市青少年育成市民会議及び警察署長、愛知県知事より感謝状受領、「二南わらじづくりの会」（代表西川貞夫氏）が豊橋市青少年育成賞を受賞。

これまで健全育成会はPTAや地域の人々と協力して、親子ふれあい活動や地域の人々に学ぶ活動を実施してきたが、犯罪や事故から

子どもの生命を守ることが昨今の緊急の課題となっている。

そのため健全育成会は平成14年度以来、自動車や自転車につける「防犯パトロール」のステッカーを作成、地域やPTAの方々に校区内の防犯パトロールをお願いしている。

また「二川子どもを護る会」では「あそこにもここにもあるよ地域の目 僕を私を見守っている」という幟のぼりを大量に作成、各学校周辺や各町内の要所に掲げ、「こども110番の家」連絡会議や護る会総会など情報交換が密に行われるよう対策を講じている。

平成18年度より、多発する子どもを狙う犯罪を未然に防ぐため、「二川子どもを護る会」の活動のひとつとして、小学校PTAで「子ども見守り隊」を結成し活動を開始した。

## (3) 更生保護女性会

昭和63年、二川南校区設立と同時に更生保護婦人会が設立され、河合幸子会長の下、役員4名を決めた。市更生保護婦人会規約を参考にして「二川南校区更生保護婦人会規約」を作成し、活動を開始した。平成3年から会長が河合シズ子となり、平成15年に「二川南更生保護女性会」と改称された。現在の会員数は23名である。

更生保護とは、犯罪や非行に陥った人たちが再び社会の一員として立ち直るのを助けようという活動であり、更生保護女性会は、広く社会の人々に更生保護への理解と協力を得るための活動を行っている。

犯罪、非行防止活動、社会を明るくする運動では、総代会や保護司会をはじめとする各種団体と協力し、青少年の健全育成に取り組んでいる。また、いきいきとした子育てを行うことができるように、地域活動の中で会員の経験と知恵を出し合って子育て支援活動を行っている。



ひたたくり防犯訓練

毎月15日の防犯の日には、児童・生徒の安全を願い通学路での交通安全指導やあいさつ運動を行っている。そのほかにも地下道清掃、非行防止夜間パトロール、少年院・刑務所参観研修、矯正施設清掃、薬物乱用防止運動、共同募金活動、530運動、学校花壇手入れなどを行っている。

更生保護女性会は、校区の方々の理解と支援のもとで、心豊かに暮らすことのできる明るい社会の実現を目指して活動を続けている。

#### (4) 民生委員児童委員協議会

民生委員児童委員協議会は二川中学校区全体を一つに二川協議会として委員22名で組織されている。二川南校区では昭和63年、校区設立から平成4年までは森長省堂が、平成5年から現在まで藤城民男（現二川協議会会長）が二川南校区代表を務めている。人口の増加に伴い現在では委員も増員され、二川南校区は各担当地区（町内）を受け持つ8名の委員（藤城民男、大森信子、村田美千代、大石雅祥、三浦洋子、中川稔、荒井康弘、小野田修）と中学校区全体の児童問題を担当する主任児童委員2名（筒井美佐代、梅岡愛子）で任に当たっている。民生委員児童委員は月に一度の定例協議会をはじめ大きくは高齢者福祉、障害者（児）福祉、児童福祉、地域福祉という4大福祉に関する諸問題に取り組んでいる。

高齢者福祉、障害者（児）福祉では一人暮らし老人、高齢者世帯、寝たきり老人などの見守り、訪問、敬老祝い金や見舞金の配布などを行っている。児童福祉では小学校、中学校における不登校をはじめ各種の問題について連絡会を開催し、学校と連携し各家庭への援助、支援をするよう努めている。地域福祉では共同募金活動、コミュニティ活動への参加や敬老会、成人式への参加協力や地域に発生する諸問題について各種団体と協力し取り組んでいる。守秘義務を遵守しつつ活動を推進していくという民生委員児童委員の仕事は大変難しい面もあるが、今後ますます高齢社会となっていく中でこの二川南校区内においても様々な問題が多くのご家庭で起こってくると思われる。こうした中、地域に発生する事例や悩み、相談事に対し速やかに行政や福祉施設等と連絡を取るなど、パイプ役としての役割を果たしていくことが重要であり、日々行政の目となり耳となる活動を続けている。

#### (5) 二川南分団（消防団）

現在、二川南分団は、西部・東部の2部で構成しており、西部に車両1台、団員15名、東部に車両1台、団員12名の合計27名の消防団員を有し、火災防止の啓発や火災発生の際の消火活動また災害時の応援活動を行っている。また、そのための訓練、毎月1日、19日の消防車やポンプの点検作業を行い、いつでも敏速な対応ができるように心がけている。また、校区行事への参加も行っている。

団員は、団が校区を火災や災害から守るという強い使命感と信念をもって、各自取り組んでいる。

#### 【20年のあゆみ】

S62・西部詰所完成

H1・東部詰所完成

- H11・第4方面隊操法大会優勝
  - ・市操法放水競技大会操法の部第3位  
(同大会総合優勝)
- H12・第4方面隊操法大会優勝
- H13・第4方面隊操法大会優勝
- H14・西部新車両導入
- H15・第4方面隊操法大会優勝
  - ・東部新車両導入
- H16・第4方面隊操法大会優勝
  - ・市操法放水競技大会操法の部第3位
  - ・二川南校区竜巻による災害出動
- H17・第4方面隊操法大会優勝放水競技3位
  - ・市操法放水競技大会総合優勝



操法放水競技

### 【1年の主な活動】

- 4月 ・幹部講習会 ・第4方面隊結隊式
  - ・新人基礎訓練
- 5月 ・方面隊操法大会 ・水防訓練
  - ・市操法放水競技大会／早朝練習
- 7月 ・県操法放水競技大会 ・プール警備
- 8月 ・校区納涼夏祭り警備
- 9月 ・市総合防災訓練 ・校区体育大会
  - ・各地区防災訓練
- 10月 ・祭礼警備
- 11月 ・林野火災訓練・秋季火災予防運動
  - ・校区防災訓練
- 12月 ・年末特別警戒
- 1月 ・消防出初式
- 3月 ・消防団観閲式 ・春季火災予防運動



### (6) 老人クラブ

二川南校区老人クラブは昭和63年に発足し、現在9単位クラブで構成されている。毎月1回の会長・女性部長会で事業計画の立案や情報交換等を行い、市老連の事業への参加協力、校区コミュニティの事業への参加等、積極的な活動を展開している。

高齢者の生きがいや生活向上、健康維持や安全確保の課題は切実であり、各単位クラブのきめ細かく継続的な活動が期待されている。寝たきり老人宅(約40名)への友愛訪問や一人暮らしや老夫婦宅(約60名)への一声運動、交通安全教室、健康教室を積極的に実施するとともに、自らの健康維持や交流のためにゲートボールやグランドゴルフ、ペタンク、各種趣味の教室などに参加している。

また、多年にわたり培ってきた知識と経験を生かし、幼稚園・小学校・中学校への労力奉仕や体験学習の講師として協力し、二川南小学校、希望が丘幼稚園との三世代交流事業を毎年実施している。



お手玉どう？

近年は子供を対象とした悪質な犯罪やいたずらが多発しているため、老人クラブ会員も子供達の安全を守るために積極的に「防犯パトロール」の活動に参加している。

校区老人クラブの自慢は年2回の1泊2日の親睦旅行で、多くの会員が楽しみにして参加し親睦、交流を深めている。

## (7) 文化協会

二川南校区文化協会は平成2年に発足し、幾多の困難を克服しながら現在に至っている。

平成17年現在、26サークルが加盟し、舞踊、三味線、書道、児童画、手芸、生花、柔道、詩吟、健康体操、カラオケ、太極拳、大正琴、社交ダンス、アコーディオンなどを行っている。

各サークルは幼児から高齢者まで、それぞれが学習活動を行えるよう工夫し、生涯学習機会の充実発展をめざしている。

会員総数は約350名で校区市民館や老人センター、禎紫園、各地区の習字教室、カラオケ教室などを拠点に積極的に活動している。

二川南校区は歴史が浅く、住みよい校区を構築するためには校区民一人ひとりが一生涯学び続ける意欲をもち、お互いに開かれた関係で幅広く連携、協力することが不可欠で、文化協会はその一翼を担い、「明るい豊かなまちづくり」「ともに生きるまちづくり」をテーマに地域の文化、教育の向上発展に努めている。

文化協会は平成7年と平成14年に改革が行われたが、毎年1回、二川南校区文化祭を開催したり、二川地区市民館まつりに協力したりして活動や発表の場を広げ、会員相互や校区民との交流を深めている。また、校区コミュニティ推進運営委員会に所属し、校区主催の各種事業にも積極的に参加協力している。

## (8) 子ども会

二川南校区子ども会は昭和63年発足当時9単位子ども会でスタートし、現在は10単位子ども会となっている。子ども会は地域協力のもと、子どもたちの健全な育成をはかるために活動している。

### 【校区子ども会行事】

#### ◆フットベースボール大会

平成7年度から4年生以上の男女が参加し、審判などは保護者が行っている。

#### ◆校区リーダー研修会

5年生を対象に、リーダーの育成をはかるため毎年研修に出かけている。施設見学と体験学習を通し、ルールを守る、みんなで協力し合う、などを学ぶために開催している。

#### ◆ドッジボール大会

1・2年生の混合チーム、3・4年生の男子、女子、混合チーム、5・6年生の男子、女子、混合チームで対抗試合をし、審判は5・6年生が行う。審判講習会では、子どもたちがルールを学び、実際に試合形式で審判のやり方を覚えていく。

### 【単位子ども会行事】

各単位子ども会では、校区行事に向けての練習、資源回収の手伝い、地下道や神社の清掃、クリスマス会、豆まき会、お楽しみ会やお別れ会など様々な活動をしている。

市の子ども会は、みんなが積極的に参加できる活動をめざして、スポーツ好きな子どもたちしか参加しない傾向にあるスポーツ大会を平成18年度に廃止することとした。子ども会活動は、大人の考えや意見を押し付けるのではなく、子どもたちが考え、話し合って何をどのようにするかを決めていくことが望ましい姿である。校区子ども会でも、だれもが楽しめて、進んで参加できる活動をめざすため、保護者や地域の更なる協力が必要である。

## 第3章 教育と文化

### 1 学校教育・幼稚園

#### (1) 二川南小学校

##### ①開校から今までのあゆみ

昭和55年（1980）、二川小学校過大校解消のため、対策委員会を発足した。8年を費やして昭和63年4月、15学級549名の規模で開校した。門をくぐって右手には、高橋規夫氏の体育館壁画が見える。当時豊橋市で初のオープンスペースが注目をあびた。



元気に登校

初代三田勝啓校長は、「創造とチャレンジ」を合い言葉に個性重視の教育実践を目指し、そのもとで職員が一丸となって新しい学校作りを行った。

校歌は、池田謙氏の歌詞に当時全国的に有名な作曲家であった岩河三郎氏に作曲していただいた。開校時の音楽主任が東京まで出向き、体当たりの交渉をした努力の結果である。校章は、豊橋市の図工研究部の先生方によってデザインされた。「ふくよかで、たくましく、なんでもチャレンジするように」という願いがこめられている。

開校以来、平成17年度までに1,677名の児童が二川南小学校を巣立っていった。

#### 二川南小学校 沿革

昭和63年(1988)	開校式、校歌制定発表会
平成2年(1990)	校舎増築
〃 3年(1991)	荒田池オープン
〃 4年(1992)	学習指導研究発表会
〃 7年(1995)	青少年赤十字活動発表会
〃 9年(1997)	10周年記念式典
〃 12年(2000)	特殊学級（ふたば）新設
〃 13年(2001)	学校週5日制実施 エキスポ二南開始 荒田池ネイチャーランド完成 市内サッカー大会優勝
〃 14年(2002)	荒田池もりもりんこ田んぼ造成
〃 15年(2003)	二南クリーン作戦実施 幼小連携研究成果を誌上発表
〃 17年(2005)	南校舎増築、図書室新設
〃 18年(2006)	2学期制導入

#### 【学習指導研究】

平成2年度には、校舎が増築され、平成3年度には、学習にも遊びにも利用できるように荒田池が整備された。2代糸柳弘校長の「全ての基本は子供主体の授業をすることにある」を合い言葉に学習指導の研究・実践を積み重ね、平成4年度には、「自ら学びつづける子どもの育成」という研究主題で研究発表会を行った。研究発表会当日は、オープンスペースを多目的に活用し、多様に展開する学習活動に参観者から感嘆の声があがった。

### 【青少年赤十字活動】

3代皿井信校長のもとでは、平成6年度に青少年赤十字活動研究推進校の委嘱を受け、平成7年度に青少年赤十字研究発表を行った。学校目標「考える子・温かい子・がんばる子」の達成に努めることが青少年赤十字の活動であると考え、「温かい心で、生き生きと活動する子どもの育成～気づき、考え、実行する活動を通して」の研究主題のもとに実践をした。

また、学芸会では、校長先生自ら得意のマジックを披露する場面もあり、温かい雰囲気を楽しむことができた。

### 【10周年記念式典】

4代丸地建郎校長が赴任された平成8年度には、新しい児童会行事「カルナパール二南」や「コンピュータ教育」が始まった。平成9年度は開校10年目の節目にあたり、10周年記念式典が盛大に行われた。

荒田池ネイチャーランドで大きくなった2頭のヤギ「フータ」と「ナンナン」の間に生まれた赤ちゃんヤギには、子供たちが丸地校長の名前から「マルちゃん」と名前をつけ、仲良く遊んでいた。

### 【地域と共に】

5代長瀬充代校長にバトンが受け継がれた平成14年度には、地域のボランティアの方々により、もりもりんこ田んぼができた。この田んぼで子供たちが総合的な学習の時間を使い、ボランティアの方々に教えていただきながら米作りをするようになった。翌年、地域との交流を深めることをねらい、地域ぐるみの「二南クリーン作戦」も始まった。

平成17年度には、校舎増築（6教室増）の際、明るくて広い図書室ができた。これを機に、図書館司書、司書教諭、図書ボランティアを中心に読書指導が充実し、読書で豊かな心を育み、言葉を大切にした教育が展開され

ている。さらに、自分で言葉を組み立て、自分の思いが自信をもって言える子供の育成、勢いのある授業、活力のある学校を目指している。

### ②二川南小学校の特色

#### 【豊橋初のオープンスペース】

授業での利用をはじめ、学年集会やたてわり遊び、総合的な学習のグループ別発表など活用範囲は広い。パーティションをはずすと教室とオープンは一続きになる。



オープンスペースで発表

#### 【中庭整備活動】

中庭にある花壇や池は、PTA奉仕活動によってつくられたものである。新設校は、設備が整わずに不便な思いをすることが多いため、「みんなで創ろう二川南」を合い言葉にPTA奉仕活動が始まった。平成3年度の中庭の温室づくりをはじめとして、池づくり、花壇づくりなど、積極的な活動が続けられた。



お父さんたちが池づくり

### 【荒田池ネイチャーランド】

子どもたちが、学習にも遊びにも利用できるように、平成3年に荒田池が整備された。その後、平成13年には、学校夢づくり事業の委嘱を受けて荒田池及び広場の改修が実施され、「荒田池ネイチャーランド」としてリニューアル。さらに、翌14年には、「もりもりんこ田んぼ」が完成。米作り体験、魚釣り、野鳥観察、ヤギの世話や乳搾りなど、授業や放課に大活躍、二川南自慢のスポットとなっている。



荒田池で魚とり

### 【親子ふれあい活動】

開校当時から17年間、ずっと続いている親子ふれあい活動。学校と家庭の教育を見直し、受け身のPTAから積極的に参加するPTAの活動を目指して始められたものである。毎年、学年ごとに活動内容を決め、学級委員のお母さんを中心に企画運営されている。「わらぞうり作り」や「豊橋筆作り」「ドッジボール大会」など、親と子が仲良くいっしょに活動する行事であり、子どもたちも楽しみにしている。また、運動会でも、親子ふれ合い種目を取り入れ、親子で気持ちの良い汗を流している。

平成18年度からは2学期制導入に伴い、より充実した活動とするため、学年の枠を取り払い、夏休みに実施することとなった。



親子でわらぞうり作りに挑戦

### 【たてわり活動】

開校2年目より始まったたてわり活動。放課を使ってのたてわり遊びやふたば集会でのゲーム、運動会でのたてわり種目などで、仲良く協力しながら活動し、縦のつながりを深めている。



たてわり班対抗長縄大会

### 【プール開放】

平成7年より、コミュニティ推進事業として、夏休みに1回、土、日の2日間、子どもも大人も泳げるようにプールが開放されている。運営は、全て各種団体の役員や委員で行われ、受付、屋上までの案内、安全管理など様々な役割を分担し、スムーズに運営されている。

### 【二南オリンピック&カルナバル二南】

開校時より平成7年度まで8年間、二南オリンピックが開かれた。二南オリンピックと

は、児童会主催によるもので、毎年児童会が趣向を凝らした遊びを考えて、それをたてわり班単位で楽しみながらまわるというものであった。

平成8年度には、総合的な学習を見据えて、二南オリンピックからカルナバル二南に名称を変更した。環境・福祉・国際理解・地域理解・いのち・平和・環境のテーマについての学習を深めて、それを全校に広めるためにお店を開くというように、内容も一新し、平成12年度まで5年間実施された。

### 【エキスポ二南】

平成14年度から総合的な学習が本格実施されることを受け、平成13年度より従来の「カルナバル」と「学芸会」を統合して、新たに「エキスポ二南」という行事を開くこととした。「エキスポ二南」は、生活科・総合的な学習の発表の場であるが、学芸会の要素も取り入れ、表現や音楽など幅広い行事としている。各学年でテーマを考えて、学習したことを劇や音楽や紙芝居で発表したり、体験コーナーをつくったりして、楽しく見学、参加できるように工夫をしている。



エキスポ二南のオープニング

### 【増築と改築】

1回目の増築は、開校3年目の平成2年度。開校当時から、白い校舎の南側には、いつで

も増築できるように壁面に鉄骨が伸びていた。各階2教室で、南向きの造りは、日光が差し込む快適な普通教室となった。併せて、改築工事により、家庭科室、視聴覚室（現コンピュータ室）が加えられた。

2回目の増改築は、平成17年度。従来の図書室の横にあった普通教室が改装されて、木目の美しい広々とした図書室ができた。新しい図書室の名前は、子どもから応募された「本の森」に決定。本の貸し出しは全てコンピュータ処理となった。



本の森

さらに、平成2年度に増築された普通教室につなげる形で、新たに普通教室が各階2教室ずつ増築されることになった。中庭はやや狭くなるが、教室が増えることで、図工室などの特別教室が確保されたり、少人数指導の授業などがやりやすくなったりして、ますます快適な二川南小学校になった。



平成17年度増築完了

## (2) 二川中学校

### ①開校当時の様子

昭和22年(1947)、戦後の貧しい混乱期に、愛知県渥美郡二川町立二川中学校が誕生した。しかし、校舎はなく、現二川小学校を借りての午後の授業、職員室は役場の2階、職員の出勤は午前11時頃という変則的な状況であった。何もかも不足の時代であったが、生徒たちは、みな明るく元気に登校していた。そんな生徒たちのために町の人々は、校舎建設に向け、苦しい生活の中、建設費の負担や運動場の整地作業に尽力した。先生も生徒も協力して作業を行い、少しずつ環境を整えていった。昭和20年代半ばからは部活動にも力が入り、バレーボール部・テニス部をはじめバスケットボール部・卓球部と県大会優勝が続いた。一方、絵を描く指導が盛んで、多くの卒業生が、素晴らしい絵画を残した。現在、二川中学校の校舎内にも寄贈絵画があちこちに掲げられている。

校舎・体育館等の充実の中で、昭和50年代の部活動の実績には、目を見はるものがある。女子バレー部の全国大会出場の年は、校訓碑「なせば成る」ができた年でもある。また、昭和60年代から平成9年頃にかけては、水泳、卓球、弓道、バレーボール、サッカー、ハンドボール、陸上競技と、県大会に数多く出場するなど部活動の活躍が盛んであった。



昔の二川中学校校舎

### ②二川中学校の歩み

昭和22年(1947)	渥美郡二川町立として開校
〃 23年(1948)	新校舎完成
〃 30年(1955)	豊橋市立に変更、校歌制定
〃 33年(1958)	産業教育研究発表会
〃 36年(1961)	新校舎竣工式
〃 38年(1963)	ミルク給食開始
〃 39年(1964)	特殊学級開設
〃 43年(1968)	新校舎完成
〃 44年(1969)	完全給食開始
〃 45年(1970)	体育館完成
〃 47年(1972)	木造校舎取り壊し
〃 48年(1973)	学習指導研究発表会
〃 49年(1974)	プール竣工
平成10年(1998)	学校林活動開始
〃 15年(2003)	生徒指導研究発表会

### 歴代校長

初代 大羽 保郎 22-27	8代 近藤 正典 57-60
2代 藤城 善次 28-35	9代 林 勲 61-63
3代 丸山 実 36-39	10代 伴 角治 H1-3
4代 金子 壽美 40-43	11代 森田 元啓 4-6
5代 山本 駿 44-46	12代 高柳 一敏 7-11
6代 岡本 健一 47-52	13代 鈴木 邦人 12-17
7代 倉内 敏彦 53-56	14代 新美 良典 18-



現在の二川中学校正面玄関

### ③現在の二川中学校と特色

#### 【二川中学校の現在のようす】

平成17年度現在、学級数17（含特殊学級）、生徒数588名、卒業生の数は、13,699人を数える。平成15年の生徒指導研究発表の流れを受け継ぎ、諸活動を実施している。その中で、特色ある活動としては学校林活動、二川宿本陣まつりへの参加などがあり、地域と共に活動している。

#### 【学校林保全活動】

戦時中に乱伐された山林を回復し、治水を図るため、昭和25年3月にマツ29,400本、ヒノキ3,180本、クヌギ2,000本を植林した。その後、下草刈りや、立ち木の伐採作業、補植などを行い、昭和28年4月にも全校で植林を行った。昭和32年3月までは、全校で下草刈りなどの世話をしていた。

昭和37年2月、岩崎地区から発生した山火事が、稜線を越えて学校林に延焼し、7割近くが消失した。消失林の後整理は、営林署に依頼した。その後、二川中学校の生徒が、学校林に関わることはしばらくなかった。

平成10年になって、改めて学校林の存在が知られ、全校で保全活動に取り組むことになった。平成11年度に、学校林の保全活動が市の「学校・夢づくりプラン」に承認されたのをきっかけに、本格的に取り組むことになった。平成12年度からは、学校林保全活動をグリーンハート大作戦と名を変え、地域の人とともに活動している。

毎年の作業の結果、ヒノキの根元まで日が差すようになり、おやじの会の人などがベンチやざら板を製作してくれたり、用務員さんが中心となって卒業生に記念品としてキーホルダーを作ってくれたりしている。



学校林でのグリーンハート大作戦

#### 【二川宿本陣まつり】

平成13年度より2年生全員が、二川宿本陣まつりへ参加するようになった。13年度は、大名行列や往来する人たち・駐車場係・アナウンス・テント張り・記念品作りなどを行い、14年度は、土産物屋・やおや・往来パフォーマンス・わらじ作りなどが加わった。

さらに、15年度からは、総合学習としてPR&マーケティング、クイズスタンプラリー、祭り囃子、大名行列、パフォーマンス、藁草履の6つの部門に分かれて、それぞれ調べ学習や練習をしてから二川宿本陣まつりに取り組むようになった。16年度には、総合的な学習の「農業体験」で育てた野菜を茶店で売り、平成17年度にはロックソーランが加わるなど、年々活動が華やかに充実してきている。



本陣まつりでの祭り囃子

### 【新しい生徒指導】

平成15年度、『生徒指導』研究発表の研究主題は、「輝く未来を見つめながら意欲的に自らを創造していく生徒の育成～教育カウンセリング理論を基盤とした諸活動を通して～」であった。学校教育を「生活サポート」「学級経営」「生徒会活動」「授業づくり」「地域連携」の5つの分野に分類し、それぞれがかかわり合う中で、未来を見通しながら創造性を発揮することのできる生徒の育成を目指して、生徒指導の研究に取り組んだ。教師と生徒、生徒と生徒の関わりを大切にする中で、ふれあいや思いやりの心を育て、不登校や問題行動を予防し、可能性を開発する教育活動などで、効果を上げ、今も継続されている。

### (3) 時習館高等学校・二川分校

戦後、高等教育の重要性が大きく叫ばれて各地に定時制高校が設立された。昭和24年2月には、蒲郡高校二川分校が認可、設置された。まもなく豊橋時習館高校二川分校と改称。分校は、二川中学校の敷地内に残っていた元青年学校の廃屋同然の校舎を改築して開校の運びとなった。その後、新校舎が二川中学校東側に新築され、昭和47年に閉校されるまで、農村地帯二川の教育の中心的存在となった。分校跡には記念碑が建っている。



二川中学校と二川分校1970年頃

### (4) 希望が丘幼稚園

#### ①沿革

昭和40年代から人口が急激に増加し、学校や幼稚園等の過大校、過大園の解消が急務となっていた。二川地区においても、本来の保育、教育ができない現状を憂う前市議会議員藤城善次（号明睦）が地元住民の強い要望を受け、自ら幼稚園設立を決意し、昭和53年2月、県の認可を受け学校法人明睦学園を大岩町大穴地内に設立した。藤城善次（第2代二川中学校長）は「よい人間、よい学校、よい社会」の実現を目指し、二川南小学校設立のために尽力していたが、幼児教育こそが教育の原点であるという考えのもとに、教育の理想を追求しようとしたのである。そして同年4月<目と心の行きとどく、そして共に育つ幼稚園>として希望が丘幼稚園を開園し、園長に就任した。開園当時は、160名の定員であったが、平成6年度より225名、平成17年度より250名に増員されている。平成2年に藤城民男理事長、藤城映美園長に引き継がれ、平成17年度より理事長が園長を兼任している。



希望が丘幼稚園

#### ②希望が丘幼稚園の特色

##### 【はだしの教育、感性を育む教育】

開園当時から、“強くたくましい子”をモットーに、園庭は「芝生」、そして園内では「はだし」で生活している。自然にかえって、いきいきと意欲的に遊んでいる子どもたちの

姿がそこにはある。また、園周辺へのお散歩や動植物公園をはじめ、多くの自然とのふれあいの中で子どもたちの感性を豊かに育む教育を実践している。



はだし?の園生活

### 【個性尊重の教育】

同じ年代の他の子どもと比較しない。ひとりひとり発達段階が違っているの、早いか遅いかの違いで、遅いのは「ダメ」ではない。子どもを型にはめず、自由に伸び伸びとひとりひとりの個性を大切に育てている。ひとりひとりの発達に合わせた教育（保育）を実践する中で、集団生活をする上でのルールもしっかりと学ばせている。



園庭にて読み聞かせ

### 【プール遊び】

子どもの強い意志と体力づくりをめざして、6月中旬から9月中旬まで、たっぷりプール

遊びをしている。連日、子どもたちの大歓声に包まれるプールは、7m×5mの広さで、紫外線防止の屋根がついている。

### 【創作活動】

ダンボールや空容器など廃材を使っての創作活動。年間を通して、子どもたちは、好きな時に取り組み、創造的、個性的な作品を作っている。これは、決められたもの、与えられたものでしか創作することができない人間にならないために、自分の力で考え、知恵を出し、想像力を豊かにし、自主・自立の力を育てている。

### 【幼小連携】

数年前から取り組んでいる幼小連携活動では、平成14、15年度文部科学省（愛知県教育委員会）から研究指定を受け積極的な活動を展開している。幼稚園から小学校へのスムーズな移行のために、二川南小学校をはじめ各小学校との情報交換、教諭の交換体験授業、幼児、児童の合同交流授業など、各行事への参観、地域の方たちを含めたふれあい合同授業など年間を通して幼小の連携を推進している。

### 【子育て支援活動】

母親の就業支援、育児に関する相談、講座などの要望が年々増加する中で希望が丘幼稚園では、預かり保育（毎日降園時刻の1時間後より夕方18時まで実施）や長期休業日預かり保育（夏休み、冬休み、春休みに朝8時30分から夕方18時まで実施）、子育て広場（未就園児とその保護者を対象に毎週1回開催）、親子ふれあい広場（在園児、未就園児、小学生とその保護者を対象に毎月2回園庭開放、子育て相談、講座等開催）などを実施し子育てセンターとしての役割を果たしている。

## 2 社会教育委員会

### (1) 二川南校区の活動

昭和63年に二川校区から分離して創設された二川南校区は、学校や各種団体との連携を図りながら、様々な活動を推進してきた。

社会教育委員会委員長は、コミュニティ推進運営委員会の委員長を兼務し、校区事業の企画運営と各種団体の調整役を担うなど、校区の重要な役割を果たしている。

各種団体の代表で組織するコミュニティ推進運営委員会は、青少年健全育成会の役員会として、子どもに関わる問題の情報交換や協議を行ってきた。

国道1号線の地下道が暗く危険だという課題については、平成4年から2ヵ年をかけて、子どもと校区民が壁画を描いた。それらは力作ぞろいで、今も明るさを放ち、利用者の心を和ませている。

新しい校区の基礎づくりの節目となったのは、県指定の家庭教育推進事業（平成4、5年）と交通安全モデル地区指定（平成5年）、さらには、生涯学習時代が叫ばれる平成7、8年の豊橋生涯学習計画の一貫であるコミュニティスクール研究指定などである。学校と地域が連携してこれらの課題に取り組むことにより、校区内の危険箇所への看板設置や社会を明るくする運動、防犯パトロールなどコミュニティ推進運営委員会で提案される各種団体の事業が、校区の事業として理解され、実施される協力体制が整えられていった。

平成6年から毎年8月の第1土日に開催されることとなった納涼夏祭りは、当校区の「ふるさとづくり」事業であり、社会教育委員会が中心となって、宣伝回覧の作成、会場準備、各種団体が担当する模擬店の出店計画などを練り上げている。納涼夏祭りの参加者は年々増え続け、他校区にも知られる特色ある

事業となっている。



地域の楽しみ納涼夏祭り

納涼夏祭りのメインとなる踊りは、青年団OBを中心とした踊りを楽しむ会の「あすなる会」が担当し、踊りの指導から本番に至るまでリーダーシップを発揮し、牽引している。

また、平成5年から参加している豊橋まつりの「市民総踊り」は、コミュニティの事業として定着し、14年には二川南校区の法被もでき、各種団体や小学校職員、一般参加者も含めて毎年150名以上が参加する事業となった。市民総おどりに校区として参加したのは、二川南校区が初めてである。

また、平成7年のコミュニティスクールから始めたプール開放は、現在も毎年夏休み7月最後の土日の2日間実施している。



プール開放

## (2) 成人式と敬老会

社会教育委員会が女性部の協力を得て主催する事業は、成人式と敬老会である。成人式は、校区発足の翌年である平成元年の成人式より二川南校区として実施している。

21世紀を担い、地域のリーダーとなる新成人を祝うため、社会教育委員会は、知恵を絞り、心に残る成人式にしようと、準備、運営に当たっている。平成9年の成人式は、二川南小学校第1回の卒業生で、この時から式の中でタイムカプセルの披露を始め、現在まで引き継がれている。

平成16年からは、豊橋市全体で、新成人が式典に出席しやすいように「成人の日」の前日の日曜日に実施することとなった。

昭和63年度から平成3年度まで総代会主催として実施してきた敬老会は、平成4年度から、社会教育委員会の主催で実施している。対象は、校区在住の75歳以上のお年寄りで、平成9年度の340名が平成18年度には561名と大きく増えている。

毎年禎紫会の皆さんによるすばらしい舞踊や親子笛の会（平成3年PTAを中心に組織）によるリコーダー演奏で楽しんで頂いている。そして近年はフラダンスや和太鼓と出し物を増やし、お年寄りに喜んでいただけるよう工夫している。

小学校の体育館で実施する成人式や敬老会の準備は大変な作業であるが、平成15年度からは、総代会や各種団体が会場づくりに参加している。

このことは、コミュニティ活動の理想の姿として、他校区に誇り得るものと感じている。その他、社会教育委員会が関わっている事業は、二川地区市民館祭りで、二川、谷川と合わせ3校区の社会教育委員が協力して展示場づくりや、芸能大会の司会進行役などを務めている。



乾杯！

## 二川南校区への思い

初代社会教委員会委員長  
田中敏一

私は校区創立当時、社教の会長とPTA会長の要職をいただき、総代会や学校と連携して新しい地域づくりに大きな夢を描いていました。校区づくりは「人づくり」、学校づくりは「地域づくり」と考え、東奔西走したことがなつかしく思い出されます。

あの頃はPTAの組織をどう活用するか、地域活動の原動力となる各種団体のエネルギーをどのように結集させるかが大きな視点でした。私達は地域の古老や先人のご意見を拝聴し、創立当初の多くの担当者の皆様と激論を闘わせ、熱い思いを語りあいながら、地域と学校の基盤づくりを進めてきました。

そのなかで、現在継続されているコミュニティ推進運営委員会の組織と活動を充実させました。これは総代会や各種団体の活動を周知させたり、支援しあったりして校区の要として活動できる組織体制です。もちろん学校や健全育成会の活動を校区ぐるみで支援する体制でもあります。

私は校区づくりへの思いは誰にも負けないという自負をもって現在も支援させていただけることをうれしく思っています。

### 3 社会体育委員会

社会体育委員会は、昭和63年の校区発足以来、校区民の親睦と体力向上を目指し、さまざまな体育・スポーツ活動を行ってきた。

現在、校区選出委員・町内選出委員34名と市体育指導委員2名で構成されている。

#### 【市内に誇れる校区体育祭】

校区体育祭は、毎年9月の第1日曜日に開催し、玉入れ、むかで競争、玉送り、綱引き、男女年齢別リレー、老人クラブ・子ども会関連競技などを行っている。

競技では、市中央大会代表権を獲得するため練習を積んできた町内、親睦を目的とした町内と様々であるが、近年は、獲得点が接近し、年ごとに優勝町内が違う白熱したものとなっている。

各町内の積極的な参加（選手・応援団）により約2,000名の校区民が小学校のグラウンドに結集する姿は壮観で、豊橋市内最大規模を誇るものへと成長してきた。



みんなで準備体操

開会式には、中学校のブラスバンド部の生徒などが入場行進に花を添えている。

昼休みを利用して、二川宿本陣まつりの雅姫と琴姫の紹介、交通事故撲滅のための折鶴標語による交通安全宣言大会等、機会を利用したイベントを実施してきた。

また、閉会式後の宝くじは、お楽しみ抽選会と名称を変え継続している。

体育祭の運営は、コミュニティ推進運営委員会の各種団体が協力して行っている。

ある年、開会後に1時間程の雨に見舞われたグラウンドを、運営委員全員、さらには参加者までもが雑巾・スポンジ等で泥だらけになりながら整備に取り組んだことは、校区の団結力をうかがい知る一場面として今でも心に残っている。



バトンをつないで

#### 【校区代表チームの活躍】

豊橋市スポーツフェスタは、市内の校区から代表チームが参加して、豊橋一を競う大会である。

特筆すべきは、陸上競技大会に於ける男子むかで競争の11年連続優勝（継続中）である。わずか30世帯弱の弥栄町のチームがあげているこの功績は、豊橋に二川南校区の名を知らしめた素晴らしいものである。ここ10年の主な記録としては、次のとおりである。

★陸上競技 男子むかで競争

平成8年～平成18年 連続優勝

★陸上競技 女子玉入れ

平成9年 優勝

★軟式野球大会

平成14年、平成16年 優勝



無敵の弥栄チーム

★女子バレーボール大会

平成13年 優勝

以上のほかに、準優勝、3位など数々の実績を残している。

【多彩な校区体育行事】

校区では、二川地区体育館を利用して誰でも楽しめる生涯スポーツとして、ソフトバレーボール、インディアカ、タスポニー、ユニホック等のニュースポーツを紹介、発展させてきた。より多くの方が参加できるよう、企画・運営に工夫している。

校区伝統の男子ソフトボール大会は、二川中学校にて開催し、日曜日の一日、お父さんが汗をかき、一生懸命ボールを追いかける姿は子供に返ったような風景である。

また、平成17年には二川南小学校運動場にて、とよはし100祭プレイベントとして、オールナイト・ソフトボール大会を開催し、平成18年には、とよはし100祭地域イベント「エンカレヂふたなんフェスタ2006」の中で再びオールナイト・ソフトボール大会が行われた。この行事には小学生から高齢者まで約250人が参加し、夏の夜に約12時間、眠気を払いながら朝まで楽しんだ。

スポーツの楽しさをすべての人に

豊橋市では、幼児から高齢者まで、すべての人々が「いつでも、どこでも、だれでも」身近にスポーツに親しむことができるように「生涯スポーツ推進計画」を策定して市民の健康・体力づくりを推進しています。

社会体育委員会はその方針に基づき、これまで年間計画を立てて、校区の皆さんのスポーツ活動への参加を促進したり、各種のスポーツ大会や校区体育祭を開催してきました。

おかげで、いま二川南校区では休日などの余暇や早朝、夜間などを活用して、スポーツやニュースポーツに取り組む人たちが着実に増加しています。

地区体育館や小中学校の施設、いこいの広場はスポーツやレクリエーションに親しむ人たちであふれています。

現在の二川南校区の課題は、東部地域スポーツ広場の早期実現と、総合型地域スポーツクラブの設立です。

これまでスポーツを続けてきた人は勿論のこと、スポーツをする機会がなかった人でも参加できる環境や仕組みを整えなければなりません。

私は「スポーツが未来を変える。」  
「スポーツが校区を活性化させる。」  
と思っています。

多くの人々の努力で築き上げてきた社会体育委員会は、いま大変充実しています。

この団結力と行動力はコミュニティのプール開放や納涼夏祭りなどでも大きな役割を果たしています。

社会体育委員会は、健康・体力づくりに取り組もうとする方々を、これからもずっと応援してまいります。

二川南校区社会体育委員会  
委員長 後藤 文一郎

## 4 社寺と史跡

### (1) 大岩神明宮（大岩町字東郷内）



文武天皇2年（698）岩屋山南麓に建てられたのが最初といわれる。のち保延元年（1135）大岩村が本郷（大岩町本郷）へ移村した際、同地へ遷宮し、天正11年（1583）元屋敷へ移転、さらに正保元年（1644）二川加宿となったとき現在地へ移った。江戸時代には幕府から黒印地2石を与えられ、その格式は、かなり高いものだった。現在では、大岩の氏神になっている。境内には、寛延4年（1751）の灯笼、文化4年（1807）の秋葉山常夜灯、文政6年（1823）の手水鉢がある。

例祭は10月の第2日曜日に行われる。地元若連による手筒花火や子供による神楽の奉納も行われ、大いににぎわう。

### (2) 二川八幡社（二川町字東町）



社伝によれば永仁3年（1295）鎌倉鶴ヶ丘八幡宮を勧請したのが創立と伝えられている。慶長6年（1601）伊奈備前守より神領高2石を寄進された名社である。江戸時代には黒印地2石を受けた。

現在の例祭は10月の第2日曜日に行われ、特殊神事として神輿の渡御に従い、山車、子供神輿の供奉がある。東町・中町・新橋町の天保時代から伝わる3台のからくり山車が、お囃子にのって旧東海道に練りだす。現在では二川の氏神となっている。

境内にある秋葉山常夜燈は、かつて二川新橋町の街道榊形南にあったもので、文化6年（1809）に建立されたものである。また、二川宿の人々の寄進による灯笼2対が今に伝わっている。

### (3) 三弥八幡社（三弥町字三ツ家）



三弥八幡社の創建年代は明らかでないが、二川八幡社の社伝に永仁3年（1295）の勧請とあるのは、この（三家）八幡社のことかと思われる。神社の所在地三ツ家はむかしは、三ツ屋村または三津家村とも称していた。棟札の最古のものは、享保5年（1720）8月15日付「奉納正八幡宮當地安全如意守護攸」とある。所在地町名の三弥町は、昭和7（1932）年第二弥栄が開発されたことにより「弥」の文字を使用したものである。

### (4) 弥栄神社（豊清町字茶屋ノ下）



昭和7（1932）年第二弥栄（豊橋市三弥町）に10人の開拓者が入植した。弥栄神社は、昭和13年（1938）天照皇大神宮（伊勢神宮）を勧請して社殿を建立したもので、この時の氏子は34名であった。

なお、境内には、この地を弥栄村と命名した山崎延吉氏の書による昭和55年10月（1980）建立の開村五十周年記念碑がある。

### (5) 葦ヶ原神明宮（豊栄町字東）



昭和23年（1958）二川開拓地（豊栄町・富士見町・寺沢町の一部）の氏神として伊勢神宮より御分霊を勧請した。昭和55年（1980）社殿・社務所を造営した。

境内に平成7年10月に開拓碑が建立され、碑文は次のようである。

「戦後間もない昭和二十年十一月それぞれに故郷を去り、国策により同志130余名は陸軍用地跡に二川開拓団として入植。不毛の原野を切り開く為、幾多の苦難の道あれど互いに励まし合い今日に至る。この地域の更なる繁栄を願い、ここに入植五十周年を記念して此の碑を建てる。」

### (6) 豊清神社（豊清町字茶屋ノ下）

明治25年（1892）、豊清町の開拓者齊藤清助が豊清園（豊清町）に稲荷社を祀った。

明治41年（1908）磯辺村より移住した兵藤荒次郎らが二川八幡社より分霊して稲荷社に合祀した。

昭和38（1963）年社殿を改築し、社名を豊清神社と改めた。

平成17年は開村百周年にあたり、10月9日



に例祭および開村百年祝祭が行われ、開村百周年祈念碑「共同の心」の除幕も行われた。

### (7) 源吾稲荷神社（三弥町字元屋敷）

創立不詳である。棟札は昭和60年4月2日付「奉造立源吾稲荷神社」とある。



江戸時代初期、このあたりに二川村があったことや二川八幡社の脇宮として今でも稲荷社があることから、二川八幡社と関係が深いことがうかがえる。

### (8) 消えた村、本郷遺跡

本郷遺跡は、大岩町字本郷の二川駅の南、国道1号線と梅田川にはさまれた場所にある。JR二川駅周辺整備事業に伴い二川駅から動物公園につながる道がつくられることとなり、発掘調査が行われた。

これまで、本郷遺跡は縄文時代の小規模な遺跡と考えられていた。しかし、平成12年4月から行われた発掘調査によって、中世の建物跡が多数見つかかり、この地に大きな村があったことが確認された。

調査の結果、ここにはむかし土器をつくる仕事をする人たちが集まっていたことがわかった。

二川南小学校では、平成12、13年の2回、4年生が親子ふれあい活動として体験発掘を行い、たくさんの土器がほり出された。



## 5 二川南の昔話

沢渡池と反茂池(さわたりいけとたんもいけ)

むかし、むかし、ずっとむかしのある日のこと、西の方から大男が大きなもっこに土をいっぱい入れて、てんびんぼうをかつぎ、のっし、のっしとやって来ました。ずいぶん遠くから来たとみえて、二川あたりまでやって来ると、

「どっこいしょ」

と、こしをおろしてひと休みしました。

やがて、また大きなたてんびんぼうをかついで、歩いて行ってしまいました。

大男がひと休みしたあとは、おしりのあとが大きくへこんでいました。そこへ雨水がたまって、反茂池と沢渡池になったのだそうです。そして、もっこからこぼれた土が一方は岩屋山に、もう一方は立岩(たていわ)になったのだそうです。

小山塚(おやまづか)

むかし、源義朝(源頼朝の父)が平治の乱(1159年)にやぶれ、知多半島の野間というところ



までにごいでいきました。たくさんの家来たちはとちゅうでちりぢりになってしまいました。そうした人々の中に古渡の伊勢(ふるわたりのいせ)という武将がいました。きずつき、つかれた身をはげましあいながら、14人の家来とともに二川のあたりまで、のがれて来ました。

ところが、義朝が野間で殺されたことがわかり、みんな悲しみにくれました。主君をなくした今、追っ手をのがれて関東へ行ってもどうなるのだろう。もうこれまでだと、主君のあとをおって、せっぷくしてしまいました。

このかわいそうな人々をうめて塚にしたのが小山塚です。今ではあとかたもなく、言い伝えだけが残っています。

### 三日三升(みっかさんじょう)



今からおよそ80年くらい前のことです。弥栄(いやさか)のあたりには、まだ人が住んでいませんでしたが、豊清(ほうせい)には開たくのために多くの人々が入ってきました。でも、新しい土地での生活は苦しく、毎日毎日、あれ地をたがやしていました。

その中に松次郎というわかものがいました。この人の生活も楽ではなく、一日中、外でいっしょうけんめいはたらいていました。

東海道の南がわには田んぼがあり、その間にはいくすじもの小川が流れていました。はたらきものの松次郎は仕事のひまをみつけては、この小川に出かけ、ふなやどじょうをとっていました。家で食べきれない魚は魚屋へ売りに行きました。ふなやどじょうは3日目には必ず三升以上とれ、食べのこりは田や畑のこやしにしました。

こうして作物がよくとれるようになった松次郎は、源吾坂に家を建て、りっぱなおひやくしょうになりました。この魚をとった小川を三日三升というようになりました。

今ではこの川もコンクリートで作り直されてしまいました。

### 座頭崖（ざとうがけ）



二川南小学校の東を流れる落合川（おちあいがわ）にそってがけになっているところがあります。ここはむかし、二川と細

谷（ほそや）をむすぶ大切な道でした。木やさがしげっていて、昼でも暗く、きつねやたぬきが住んでいたそうです。雨のふる日などは、それこそ、まったくだれも通りません。

ある日のことでした。琵琶（びわ）をひきながら、物語をして歩く座頭（ざとう）が、細谷の村に来ました。村の人たちは、ひさしぶりにお話が聞けるので、よろこんでいました。ところが夕方になって座頭が、

「これから二川へ行こうと思う。」

と言い出しました。おどろいた村の人たちが、「あの道は、昼でも歩きにくいところだから、明日にしたほうがよいのでは。」

と止めました。しかし、座頭は、

「わしは目が見えないのだから、昼も夜も同じことだ。」

とみんなの止めるのも聞かず、一人で出かけてしまいました。

あくる日、このがけの道を通った村人が、がけの下に落ちている座頭を見つけ、大さわぎになりました。それからは、このがけを座頭がけとよぶようになったのだそうです。

### 源吾坂（げんござか）

国道1号線に「源吾坂」というバス停があります。このあたりの坂をむかしから源吾坂といっています。このあたりは、むかしの東海道を広げて、国道にしたところです。

もともと二川の村はもっと南の方にあったのですが、東海道がしだいに整えられ、多く

の旅人が東海道を通るようになったため、村中で東海道沿いにうつり住みました。

このとき、中心になってひっこしのさしずをしたのが、源吾という人でした。また、源吾はあれ地をたがやしたり、道や家を作ったりするのに、みんなのためにはたらきました。そこで、人々は源吾のおかげだとかんしゃして、この坂に源吾坂という名前をつけたのだそうです。

二川村は、天正13年（1585）頃から1644年まで、二川村元屋敷にありました。この源吾坂あたりが元屋敷です。

二川町東町にある十王院の境内には、寛永9年（1632）建立の「二川新町開山碑」と呼ばれる石碑があり、二川村が本郷の地より元屋敷への移転を記念したものといわれています。



### 一里山（いちりやま）



二川南小学校の校区の一番東は一里山というところで、静岡県がすぐとなりになっています。それは、むかし「一里塚」があったからです。

一里塚は、徳川家康がつくらせたものです。東海道を旅する人に道のりを教える目じるしとしたものです。一里は今のやく4キロメートルなので、4キロメートルごとにありました。けれども今ではほとんどのこっていません。

塚は道の両がわにあって、10メートル四方くらいの大きさでした。石でつくったものと、土でつくったものがあり、その上にはえのき

や松を植えて、遠くからでもわかるようにしていました。

豊橋市には、東から東細谷、二川、飯村(いむれ)、下地の4か所に東海道の一里塚がありました。現存するのは、この東細谷一里塚(北側の塚)だけです。二川の一里塚は二川宿の東の入口にあり、東町の川口屋前に石碑が残っています。

### 十七疋橋(じゅうしちきばし)



正保元年(1644)

二川村と大岩村が、それぞれ、元屋敷から、今のところにこしてきました。ところが、その時、二川村が、家々の場所を、じゅんじゅんに決めたところ、大岩村の人たちが持っている土地まで入りこみました。

その入りこんだ土地は、今の西駒屋さんのところから、大岩と二川の境までのところでした。そこで、大岩村と話し合っ、その土地を二川村がもらうことにしました。そのかわり、「お役」をよぶんにもつことにしました。「お役」というのは、そのころ宿場は、どこも、馬百疋、人足百人をいつでも用意しなければなりません。大岩と二川が、一つの宿になったのでこれを半分の五十疋、五十人ずつもてばよいわけです。

そこで、土地をもらうかわりに十七疋、十七人を、よぶんに二川が出し、大岩は、それだけ少なく出すことにしました。こんなわけで、この土地を、馬十七疋分の土地だ、ということから「じゅうしちひき」それがなまって、「じうひちき」となったのだそうです。今も二川町と大岩町の町境は、この十七疋橋になっています。現在の橋は、平成3年(1991)に改築されました。



改築前の十七疋橋(木橋)

### 二川宿本陣まつり大名行列



二川宿本陣資料館は、平成3年8月1日に開館しました。二川宿本陣まつりと大名行列は、地域の活性化と二川宿本陣資料館のPRを目的に、この年から開催しているもので、地

元小学校児童による鼓笛隊を先頭に、手踊り・奴踊りを交え、名君といわれた実在の吉田城主松平伊豆守信明のぶあきらの大名行列を、イベントとして再現しています。

この行列では、信明の娘役(雅姫と琴姫)に一般公募で選出された2人が、地元小学生が若殿(長次郎信順のぶより)とその近習に扮するなど、二川地区の皆さんを中心に、約300人が参加して、江戸時代街道風俗絵巻を繰り広げます。また、二川中学校生徒が武士・町人等に扮して「往来する旅人」を演じ、寸劇を行いながらまつりの雰囲気盛り上げたり、「本陣茶屋」として生徒が土産物屋・茶店・八百屋を開店し、観客に販売したりしています。第15回目の平成17年度には1万1千人の観客で賑わいました。

## 資料 総代会・社教・社体委員長名簿

	校区 総代会長	町 総 代					大岩町 南丘
		大岩町 久保田	大岩町 本郷	大岩町 南1区	大岩町 南2区	大岩町 南3区	
S63	鈴木正雄	白井紀雄	林 幸男	鈴木正雄			久保富次
H 1	↓	↓		↓			
H 2	林 幸男	中嶋眞澄		瀬戸 正			
H 3	↓	志賀 明		↓			
H 4	↓	↓		↓			
H 5	↓	↓		↓			
H 6	↓	↓		※H 7 大岩南を 1区～3区に分割			
H 7	↓	↓		渡辺元成	後藤弘一	瀬戸 正	
H 8	↓	加藤一八		↓	↓	田中敏一	
H 9	↓	↓			↓	↓	
H10	↓	↓			朝倉成司	↓	
H11	山本民男	↓			↓	藤城和彦	半田恭太郎
H12	↓	↓			↓	↓	
H13	半田恭太郎	↓			↓	↓	
H14	↓	↓		朝倉誠一郎	↓	↓	
H15	↓	↓		↓	西川 宏	↓	
H16	↓	↓		渡辺元成	↓	↓	
H17	↓	鈴木孝治	↓	↓	↓	戸田 制	
H18	↓	↓	伊藤 勇	朝倉康仁	佐原 恵	↓	

	町 総 代					社会教育 委員長	社会体育 委員長
	二川町 南町	豊清町	三弥町	弥栄町	豊栄町		
S63	仁枝久和	伊藤一成	水鳥恵夫	小塚 一	表 金治	田中敏一	戸田 制
H 1	↓	佐藤 進	水鳥誠一	武田勇市	清川 操		↓
H 2	中沼安則	佐藤繁男	西川奨一	↓	朝倉健二		↓
H 3	↓	森 義孝	田中慶弘	野口充洋	伊藤房男		福井利光
H 4	戸田孝春	今神 広	田中 章	↓	板橋博和		↓
H 5	落合 均	山崎千春	水鳥敏雄	鳥居洋海	↓		↓
H 6	↓	伊藤四良	西川 勲	↓	↓		平野二義
H 7	↓	後藤健一	水鳥克夫	↓	表 金治		↓
H 8	山本民男	杉浦春雄	西川浩一	小野田修	↓		佐々木 康
H 9	↓	岩瀬勝義	西川安太郎	↓	加藤雅彦	↓	↓
H10	↓	内藤勝己	白井 勝	↓	板橋博和	菅沼明男	↓
H11	↓	伊藤勝	佐原幸男	村田昭夫	中村巳太郎	近田輝幸	↓
H12	↓	内藤安明	水鳥隆夫	↓	伊藤一治	大倉 勇	後藤文一郎
H13	安田泰大	杉浦恒夫	田中康明	↓	村井信治	高橋宏行	↓
H14	↓	兵藤有生	西川弘一	河合敏彦	北林道人	↓	↓
H15	↓	柴田喜久雄	田中 九	↓	澤田参溜	神藤元廣	↓
H16	菅野隆次	長井勝治	田中敏秋	伊藤栄一	大梅義彦	↓	↓
H17	↓	三輪安裕	水鳥春男	↓	村井良夫	↓	↓
H18	朝倉勘次	浅井末義	田中 栄	杳名秀夫	石田吉弘	内藤文人	↓

## おわりに

この校区史は市制施行100周年記念事業のひとつとして全小学校区ごとに作成したものです。私たちの生活する地域の成り立ちや発展のようすを知っていただき、二川南、豊橋を誇りに思い、愛し、育てていく気持ちをさらに高めてくださればと思っています。

編集に携わり、歴史を探っていくと、恵み豊かな大地とともに生きる人々が浮かび上がってきました。そこには多くの知恵があり、苦悩や葛藤があり、汗があります。

文献を読み、資料を収集し、古老や先人からの聞き取りなど重ねましたが、それらを十分表現することはできませんでした。しかし、私たちは多くの先人の努力と、未来を見据えて新しいものを創り出そうとした意志を痛切に感ずる日々を過ごしました。

二川南は歴史の浅い校区ですが、創立以来地域づくりの第1の視点は人づくり・子供の教育だとして幼稚園や小学校、中学校と連携し、支援してきました。

おかげで今、自分たちで新しい校区を創ろうというフロンティア精神に満ち、未踏の大地を開拓するかのごとくコミュニティが強い絆で結束して活動しています。

心豊かで、活気のあるまち、自然や文化、価値などを共有し、育んでいこうとする気風のあるまちは着実に育ってきています。

「このまちに生まれ育ってよかった」

「このまちに移り住んでよかった」

と地域に住む誰もが幸せや安心を実感でき、他に誇れる地域づくりをすることが私たちの使命です。

将来を託す子供や孫に自信をもって伝え、引き継がせることのできる地域づくりこそ今日の課題です。

お読みいただく皆様には内容にご不満の点多々あるかと思いますが、なにとぞご容赦いただき、この校区史から、これから先の二川南、豊橋がどうあるべきかをお考えいただければ幸いです。

## 参考文献

- ・豊橋市史
- ・とよはしの歴史
- ・豊橋市神社史
- ・愛知国道のあゆみ
- ・学校誌（二川中学校）
- ・豊橋市政50年史、80年史
- ・二川一水と緑と歴史のまち
- ・豊橋の史跡と文化財
- ・50年のあゆみ（建設省中部地方建設局豊橋工事事務所）
- ・二川南（10周年記念誌）
- ・渥美郡史
- ・東海道二川宿の研究（紅林太郎）
- ・動物園ものがたり
- ・愛知県史
- ・ふたなん（二川南小副読本）

## 二川南校区史編集委員会

### ■委員長

半田恭太郎

### ■委員

藤城 和彦

栗本 久子

神藤 元廣

安村佳代子

岡田 久嗣

加藤 賢吾

荒井 康弘

和合 弘晴

河合 隆博

山本 晋



エンカレヂふたなんフェスタ2006 炎の舞 より

校区のあゆみ 二川南

平成18年12月25日発行

編 集 二川南校区総代会  
二川南校区史編集委員会  
発 行 豊橋市総代会  
印 刷 共和印刷株式会社

R2100  
古紙配合率100%の再生紙を  
採用しています。







2006年  
市制100周年  
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋